

寒暄を叙し了りさて言ふやう

晩生は諸公に暇を告げんため態々來訪せり頃日朝命ありて權臣を各府に派し知府知縣を便宜によりて州城若くは府城に招集し機密の會議を開かるゝに決し易州の州治に於て三州十七縣清苑、滿城、守肅、定興、新城、唐、博野、慶、深、水、以上十七縣都容城、完、蠡、雄、深、澤、京、鹿、高、陽、新、安、安、州、易、州、以上三州の長吏を徵し本年二月の初めより會議を開かるゝよしにて愚父も其期を誤たず易州の州治に赴くべければ晩生には速かに歸るべしとの書狀到來せり右の公務も相果て父の歸任するを俟ち晩生は再ひ京師に赴かんと存せりさすれば會見も何れの時に在るを期し難し因て取り敢へず諸君に名殘りを惜まんために來れり

孤峯三機密會一事
有關係於通篇後段
多少線索從是生來

京官の州治に蒞まるゝは何人なりや御承知あらは教へたまへ

確かなる報信はなけれとも愚父の推量にては多分御史楊鄒懋卿ならんと言ひ越したり
ナニ鄒懋卿、ゝゝゝ、アノ鄒懋卿、ゝゝゝ、彼權門犬と覺ゆす叫ひしが忽ちに心附きて

某京師に在りし時曾て人ありて鄒懋卿を權門の犬と罵りしが某は能く其爲人を知らず君の其素行を知りたまへるや

某も其人物の知らねとも彼れの嚴嵩の門下に出て、深く嚴氏に信任せられ近時甚だ威權ありと或人に承われり

^楊此回の會は何事を議するや御承知も候ふや
^荷機密の議なりとなれば知るに由なしされども頃日
嚴嵩父子が例の私を逞ふするより起りしとならん何れ
にせよ國家の慶事にはあらざるべし

此時楊雲は深く思案に沈み雙方の語も途切れたり暫くあ
りて楊雲は荀堅に打ち向ひ

某は君の紹介に頼りて尊大人に拜謁せんとを請求せん
と存するが許されまじきや

^荷其は甚ど易し愚父も定めて君に面晤を望むべし晩生と
共に來りたまへ

^楊御厚志の程辱けなし某は猶一事此地にて施爲すべきと
あれば君に同行は覺束なし來月は是非共遊歴の途に上

る心得なれば先づ易州に赴き尊大人を訪問すべし願く
は御歸館の上大人に其意を通したまわれ某は此地より
直ちに易州に赴き拜謁を願ふべし

^荷其等は君の便宜によりて兎も角もなしたまへ愚父には
委細申置くべし

魯英は始終黙して兩人の問答を聞き居たりしが此時雙方
の語途斷へたるを見て楊雲に向ひ

^楊楊君は何時頃當地を出發せらるゝや

^魯左ればなり來月中浣頃に出立して先づ易州に赴くべし
晩生をも伴ひたまへ晩生は諸君と別れて獨り此處に在

^楊るを好まず

某は先づ獨行せんと存するなり足下は次期の大比に是

思軒曰屬々敗露本
色

非登第して素志を貫くと肝要なるべし其頃には某も再
び京師に赴きて足下に對面すべし馬君も暫く此に在り
て某の報を待ちたまへ某の易州を去るは三月中浣なる
べし其頃までに馬君は來會したまへ共に周遊の途に上
るべし

と馬忠の方を見返れば馬忠は不快の顔色にて

何事をもなさず安閑として此に在るは面白からず

と呟きけり楊雲は聞かざるまねして

某は今より荀君と共に孫先生の許に到り委細の事を協
議すべし兩君も共に行きたまわすや

と言ふに魯英獨りは留まりたしとて辭しければ魯英に留
守を托し三人齊しく孫家を指して行きけり

孤峯云一言馬生之
真情

孤峯云善筆有神姿
張橫生

日もはや西に傾きて樓に歸る鳥影の窓を掠めて忙しくい
と物凄き夕間暮魯英は獨り案に搥れ物思はしげに見えけ
るが眉を蹙めて二筋三筋額にかゝれる緑髪を左の手にて
搔き上げ溜息しつゝ獨語

明けて言はれぬ胸の中頼もしき豪傑と心に深く信する
も今更我は婦女なりと争て其人に告ぐべきや唯我志を
果たせし後

と言ひかけて歎息なし披きし書冊を疊みながら突と起ち
て書僮を呼ひ燈火の準備を命ずる折柄楊雲は歸り來りて
笑やかに魯英に向ひ

用事は残らず爲し果てたり孫先生より傳言あり魯公子
は何故我家を嫌はるか折々は立ち寄りたまへとのと

孤峯云一句若得有
趣

にてありし

これを聞き魯英は羞かほしげにさし俯向き黙して語もな
かりけり纏て書置は燈を點し食事の用意整ひければ二人
は卓を對して晚餐を喫し了り各々書齋に入りしが楊雲は
魯英の鬱悶を慰めんとして再ひその房室に至れば魯英は遠
しく立ち迎へ相携へて坐に就けは楊雲は聲を潜め

今日孫先生の話の中に家嬢は陰鬱の症にて病床にある
趣を演べしが其容体を察するに若し相思病にては無き
やと某は深く氣遣ふなり某は今となりては足下を此處
に伴ひしを悔ゆるの念無きにもあらず凡て男子は早晩
婚娶をなさねはならず今日しも荀君の話をも聞けば孫
嬢は貞淑にして理義に賢しといへり荀君は素樸の質に

孤峯云婚娶一事生
一大論題來

て假にも人を欺かざるは某の深く信する所なり某も今
此に歸る途中にて種々考慮せしが只此に一計あり某孫
先生に事情を打明けて縁談を整へ足下は今喪中ながら
假りに此婚儀を終へ新夫婦は結婚の翌日直ちに此地を
去りて京師に出立するに若かず然らば某書を添へて父
の許に委細の緣由を申し遣さば家父は喜んで足下等夫
婦を保庇すべし然らんには足下の望の如く大比の時機
をも失はざるべく家父も亦勉めて其等の事に周旋すべ
しさて又此地に於て孫嬢は病死したりと披露し柩を具
へて葬送の式を終りなば陳文仲が意地強く付き纏ゆる
葉根をも絶ち得べし此儀は如何
と言ひ出れば魯英は驚駭と恐怖とに襲はれて全く其胸を

孤峯云不得無此疑
而如此記去不留痕
影

打ち破られ暫し呆れてありしがまた思ひ亂れし風情にて
心中更らに一種の疑を生し楊雲が若しや我身の女性なる
を推して意中を弑し見るにはあらずやと暫し心を惱ませ
しが思ひ切りて答ふるやう

晩生は假令如何なるとあるとも結婚をば爲さず晩生は
大志を抱く身なり婦女子の爲めに情を曲くべからざ好
し孫氏は其家嬢の爲めに多少の煩累を受くるにもせよ
晩生が遭遇せる大厄に比すべくもあらず某は今我家の
事と我身の事に全く心を傾注せり其餘を問ふに暇あら
ず

と決心せる様子にて其顔色は怨むが如く其音聲は怒を帯
びて暫し黙してありけるが楊雲が沈着して靜坐まいつに

孤峯云情深意長

かはらぬ爽快の風采を損せざ極めて親切なる意氣は其面
色に表はれたるを見て魯英の眼中にも終に一種可憐の情
を泛へて楊雲を見返し

思軒曰處々敗露本
色

晩生よりは聊^シ復かに年長けたり況んや清平無事の天地
に棲む身なるをや何故婚娶をなしたまはぬ但し^ニ結^ス髮^シの
佳人ありての^トか

と他事なく問はれて楊雲は微笑ながら

某實に妻を娶らずされども聊^シの如く志業の未だ成らさ
るが爲めに妻を娶らずと云ふにはあらず某は寧ろ志業
を遂げんが爲めに妻を娶らんと思ふものなり

孤峯云一句爽快反
魯英之心情處極合
情味

ナニ志業を遂くるために妻を娶るとや
然り男子は衆難を破り死生の間に出入して大業を建つ

思賢曰一句不寫魯
英而魯英狀貌心悟
活現活動絕好絶韻

るには淑徳ありて貞烈なる佳人を要するなり、
、魯君驚くを休め心を静めて聞きたまへ某婚娶の意
なきにあらす唯未だ眞の佳人に遭はざるを如何せん惟
ふに丈夫が佳人に遭遇するの難きは猶ほ名士の賢君に
遭遇するの難きが如し古より今に至るまで端麗の容と
貞淑の徳を以て所天の大業を賛翼したる佳妻幾人あ
る夫妻遭遇の奇にして寒微の間に相伴ひ艱難數奇の中
にも或は慰め或は勵まして共に功業を遂けたる唐の李
衛侯宋の韓蕩王の如きは誠に稀れなり二公の功業を建
てるは殊に夫人内助の徳によれり二公の夫人良家の子
女にあらざるも能く英雄を識るの明ありき鬚髯男子多
くは女子の淑徳あるものを知るゝ能はず妓女娼婦に懸

龍溪曰く是れ好話
唯惜む秦隋の一事
人情に近からざる
もの有るを

る多し詩にも窈窕淑女君子好仇といへり註唐布衣李
ノ時策ヲ楊素ニ獻セル中素時紅拂アリ執レテ去リ絶世
妓人ナリ李靖ノ對シテ去リシハ何レモハ逆ニ去リ絶世
美人ナリ李靖ノ對シテ去リシハ何レモハ逆ニ去リ絶世
軒ト細カニ問ヒ覺シテ去リシハ何レモハ逆ニ去リ絶世
ヤト細カニ問ヒ覺シテ去リシハ何レモハ逆ニ去リ絶世
夜ト細カニ問ヒ覺シテ去リシハ何レモハ逆ニ去リ絶世
出テ言フ某ハ楊家紅拂也ト靖一拜セテ杖ニシテ入リ來
リ自ラ言フ某ハ楊家紅拂也ト靖一拜セテ杖ニシテ入リ來
チ紫衣ヲ脱シテ帽ヲ去リテ入リ來リ自ラ言フ某ハ楊家紅
夜中何事ニ下テ來ラセヨト靖一拜セテ杖ニシテ入リ來
ベキ人ナリト信セシヨリ公ハ勿論ナリ氣ヲ靖ニ托セテ喜
態々來リシト信セシヨリ公ハ勿論ナリ氣ヲ靖ニ托セテ喜
超々來リシト信セシヨリ公ハ勿論ナリ氣ヲ靖ニ托セテ喜
遂々來リシト信セシヨリ公ハ勿論ナリ氣ヲ靖ニ托セテ喜
宗レ共ニ大原ニ走リテ大馬ノ相ニ從ヒテカテ後ハ喜至
王初メ其問ケテ人ノ内助ノ大業ヲ立テシテ後ハ喜至
ノ媚女アリテ其問ケテ人ノ内助ノ大業ヲ立テシテ後ハ喜至
出ルニ廊下ニ虎ノ如ク誰レモテ候ハズ朔ノ儀ヲ了リテ追
々人々モ入來ル驚レテ走リ出テ誰レモテ候ハズ朔ノ儀ヲ了
々人々モ入來ル驚レテ走リ出テ誰レモテ候ハズ朔ノ儀ヲ了

スレハ一人ノ兵卒前後モ知ラス熟睡シテアリ其足ヲ深
 ミ呼ビテ姓名ヲ問ハテ告ケテ此卒定メテ凡人ニアル
 マジトテ邀ヘテ縁ヲ結ビ是レヨリ常ニ金帛ヲ以テ人
 盡シテ夫婦ノ縁ヲ給キシカ世モ亦殊功ヲ立テ中興
 ノ名將ト仰カレテ至リ夫世モ亦殊功ヲ立テ中興
 レタリ勤王ノ元元ニ至リ夫世モ亦殊功ヲ立テ中興
 ントシタルニ一タ河チチ天蕩ニ邀チテ幾ト封セサ
 疏シテ言フ世忠機ヲ失ヒ敵ヲ縦ツケテ罪責ヲ加ヘン
 如ク其大臣ニ内助ヲ失ヒタルトモ推シテ英偉ナルト
 と言ひかけて快笑し

孤豈云天下子女多
 是婦富貴之人此婦

我豈寤寐に之を求めざらんや、魯君戯謔とな
 思ひたまひず某は實に閨閣畫眉の歡を求めんとにはあ
 らざ共に窮苦を與にするの佳人をば得んと願へり凡ろ
 人意を得て榮達の地に昇らば天下の佳麗は求めずして
 至るべしされども是れ我富貴に縁組せんとて來るもの

娶論是作者借士龍
 言以諷刺世弊者文
 字亦流弊通讀再三
 猶不知厭

にて言はば夫婦間の親愛は富貴を以て繋ぎ留めたるに
 過ぎず一朝貧賤の身とならんには忽ち反唇瞋目するに
 至らん人生の不幸是より甚しきは無し某は固より身の
 爲め家の爲めに富貴を求むるものに非ず只國の爲め民
 の爲めに大業を思ひ立ちたり幸にして志を遂ぐるも榮
 達の地に居るを願はず顯貴の位に就くを好まず但其志
 を遂げたるの快事は萬種の艱苦を償ふて餘りあり某は
 唯此一快事を買はんが爲めに幾多の勞苦を費やすもの
 なりされば良人によりて榮達を求むるの婦女は決して
 某に伴ふべしとも思はれむ併し魯君多年の宿志を遂げ
 て民を塗炭の中に救ひ荆棘の天地を出て錦繡の乾坤
 に立ち而して此煥然たる偉業は即ち我手に成りしを思

木堂云筆々飛動姿
眼横生

孤峯云如此婦人逐
不易求士龍眼前唯
見一人

は。丈。夫。の。快。樂。之。れ。に。過。き。た。る。と。は。あ。る。ま。じ。假。令。夢。幻。
の。顯。榮。浮。雲。の。富。貴。に。身。を。置。か。さ。る。も。丈。夫。と。し。て。世。に。出。
て。た。る。本。分。は。盡。し。果。て。た。り。と。云。ふ。べ。し。某。は。此。心。を。以。て
相。結。ひ。相。伴。ふ。の。佳。妻。を。ば。求。め。ん。と。願。へ。り。こ。の。闇。濁。な。る。
天。地。を。彷徨。し。暴。威。の。風。雨。を。冒。し。權。勢。の。雲。霧。を。披。き。正。道。
を。求。め。ん。と。せ。ば。崎。嶇。坎。珂。或。は。躓。き。或。は。倒。れ。幾。度。か。失。望。
し。て。心。氣。を。沮。喪。す。る。と。あ。ら。ん。此。等。の。場。合。に。於。て。淑。婉。な。
る。柔。德。の。内。助。に。よ。り。て。慰。め。ら。れ。つ。慰。め。つ。更。ら。に。至。難。の。
道。途。に。上。る。べ。き。勇。を。養。ひ。進。ん。て。水。火。の。中。に。入。る。も。夫。妻。
相。奨。勵。す。る。の。同。心。同。氣。に。出。る。あ。ら。ば。幾。多。の。艱。難。も。快。愉。
の。中。に。經。過。し。去。る。べ。し。何。人。な。り。と。も。只。一。人。に。て。日。夜。艱。
難。痛。苦。に。の。み。沈。み。浮。み。出。つ。る。の。術。な。く。心。氣。を。引。き。立。つ

木堂云聲唯聽到無
所不語滿

べ。き。援。助。を。得。ず。ん。ば。遂。に。自。ら。沮。喪。し。て。志。業。を。誤。る。に。至。
ら。ん。獨。り。道。を。行。く。者。幾。何。の。路。程。を。歩。む。も。荒。原。沙。漠。の。外。
に。出。つ。る。能。は。ず。ん。ば。厭。倦。の。情。内。に。萌。さ。ん。假。令。何。程。の。險。
路。を。行。く。も。時。に。紅。花。の。綠。樹。の。間。に。點。綴。す。る。を。認。め。又。清。
泉。の。巖。頭。に。噴。出。す。る。を。望。み。長。空。に。飛。鳴。上。下。す。る。禽。聲。林。
間。に。丁。々。た。る。伐。木。の。響。音。常。に。耳。目。に。觸。る。あ。ら。ば。行。路。
難。を。歎。せ。ず。し。て。千。里。の。遠。き。を。過。き。去。る。べ。し。即。ち。我。最。愛。
な。る。路。伴。は。我。爲。め。に。紅。花。と。な。り。清。泉。と。な。り。禽。聲。と。な。り。
木。響。と。な。り。て。險。阻。の。艱。苦。を。忘。れ。し。む。る。も。の。な。り。さ。れ。ば。
某。も。窈。窕。た。る。淑。女。を。ば。求。め。さ。る。に。あ。ら。ず。唯。未。た。之。を。得。
さ。る。の。み。足。下。は。今。此。得。難。き。路。伴。を。見。出。し。た。り。孫。娘。は。必。
ず。足。下。の。路。伴。と。な。る。に。堪。ふ。べ。し。

孤峯云試場考科湊
合最妙

龍溪曰く處女の意
中、露出して遺さ
ず蓋し作者人情に
通するの極、

と情を盡し理を竭し其身の上に引き當てゝいとも巧みに
論したる楊雲の物語は魯英に不可思議の感を動かし魯英
は其身まことに考試の場に入りて試験を受くるが如く自己
は能く此路伴の科目に登第するや否やと自ら省みて少し
危みしが更らに其心に信する所あるにや其身は難なく此
試場に捷を制せんと思ひ定めたるが如くに見ゆるも楊
雲は固より其真情を知らず唯魯英が慙らいたるうちにも
屹と思ひ入りて其眸子の靜着したるは自信の篤き人が事
に觸れて決意を表せし時往々見はすべき兆候なるを見
てさては我説に服して孫娘は其艱難を慰むるの路伴に適
當せりと信認したるならんと速くも臆斷し
足下が速かに得心されしは此上もなき幸なり

と言ふを魯英は聞き尤め何に得心せしとやと云ふを後に
聞きなし徐かに席を立ち去りし斯くて幾程もなく楊雲は
出立せしが魯英と手を分つ時留別の一詩を賦す

柳色青々雨意濃。陽關三疊酒千鍾。榮枯畢竟如浮影。得失由
來無定蹤。有約山靈應盼我。無言江水轉愁儂。爲思燕趙悲歌
士。故探冰天第一峯。

魯英も別を惜み一律を賦して之れに和す

不堪南浦別離新。纔聽驪歌便愴神。城郭重來應隔歲。鶯花有
幸恰逢春。詩從奇險歸平淡。交到忘形見性眞。此去請君須努
力。故人翹望馬頭塵。

第十二回

世上豈無千里馬
人中難得九皋禽

易州は府(保定)城の西北百二十里に在り秦時は上谷郡にして漢の涿郡故安易縣の地たり隋の時易州を置き大業の初め州を罷め昌黎郡を置き尋て改めて上谷郡とせり唐初復た易州を置き天寶の初め上谷郡とせり宋は遂武郡となり金には中都路に屬し元復た易州となし初め大都路に屬し後改めて保定に屬す明朝は之れに困りて州治を置きたり名勝舊跡に富める地方にして五華樓、候臺、王公臺、黃金臺、仙臺、吟詩臺等の名は世に隠れなく何時の頃好事者の構造したるにや古昔の建築に模したる樓臺は今も猶ほ其地よ存するに予易州に入るものは杖を此等の勝地に曳かざるは無し時は是れ嘉靖三十年三月初にして春風滿城楊柳

孤峯云先叙地理次叙時季然後記事秩序井然

緑を垂れ、軟草苗を鋪き、煙外の鳥聲、花間の蜂影、耳目の官に
 觸るゝもの、悉く、艶陽明媚の佳境を寫し、人をして坐るに和
 怡の情を發せしむるの時節、當り楊雲は魯英馬忠に別れ
 遙遠に暇を告げ、易州の州治に來り、深く心に思ふ所あれば
 日々各處を遊覽し、未だ苟安の許にも詣らず、頃日京師より
 來れる巡撫の舉動に注意してありし
 却説今回嚴嵩の命によりて州治に蒞みたる監察御史鄧懋
 卿は嚴嵩の腹心にして、姦智に長けたる小人なるが常に嚴
 嵩を助けて惡を爲し、偏に嵩の意を迎へて事を施しけるが
 此度もまた建議して、近時朝政を誹謗して、國事を論議する
 もの、民間に黨を樹て、其害は後漢の末の黨人にも劣らぬ有
 様に、其徒益蔓延して、政法を橫議すると、愈々甚しきに及

孤豎云此一役有大
 關係於本朝不可等
 閑觀

は、由々數大事を惹き出さん宜しく、其氣焰未だ熾んなら
 ざるの初めに之れを撲滅して、原を燒くの患を絶たざる可
 らず斯くするには威權ある朝臣各州治若くは縣治に蒞み
 最寄の守令を招集して、密議を遂げ、處士の橫議するものあ
 らば悉く法を以て之れに中て、又は事を設けて、芟除し、民心
 の之れが爲めに煽動せられて亂を思ふの路を杜絶するに
 若かずとの趣意を演へけるに頗る嚴嵩の意に通ひ、乃ち嵩
 の股肱なる朝臣を四方に派遣するととなり、因て鄧懋卿は
 此州に向ひしなり、楊雲は巷閭の風説にて、畧ほ其事情を知
 り得たるも、鄧懋卿が知縣等を召し寄せて、何事を密議する
 や其詳なるとを知るよしなれば、窈かに心を悩ましつゝ、
 一日苟安の許に至り、名刺を通したるに、苟安は兼て其子よ

孤峯云自然人情

り聞き及び殊には朝官と云ひ故人たる楊繼盛の子息なれば直ちに其室に招き入れて介意なく談話せり其後楊雲は屢苟安の旅寓を訪ふて種々談話するうちにも常に心に戒慎して一語も時事に涉らず况して嚴嵩父子の事などには毫も言ひ及ぼすとなかりし是れ一は己れの舉動より苟安の身に禍の及はんを恐れ一は其心に思ふ所ありてのとなり凡る人に對して我より秘事を聞き出さんと勉むる時は却て戒慎を加へ何事をも話さず我問ひに答ふるにも虚偽を以てするの情なきにあらず然るに若し我より問ふの心なく又強ひて求むるの意なくして懇誠なる談話のみに心を傾けたる時には問はず語りにも心事をも吐露するものなり楊雲は深く此點に意を用ひしにより問にかけて事を

孤峯云是冷語

龍溪曰孟子眸子之說不易の確言、之を驗するに多く然り作者亦た蓋し余と其説を同くする者、形容至矣

知るよりも寧ろ問はず語りの話中に眞事を解り得たり楊雲一日苟安の旅寓に至りしに圖らず一壯士に出で會ひたり許儀字伯公と稱する一表の人物にて平陽府大平縣の人なり幼少より京師に出で縉紳の門に出入して一時は權貴の人々に信任せられしものとなるが未だ試場に捷を制せしと云ふ噂もなく又自らも仕途に熱心せる模様も見えず其年紀は三十歳許先づ卓犖不羈といへる辭を以て評すべき風采なり身の丈高く筋骨頗る發達して面色は淺黒く眼中鋭く眸子の轉搖は極めて忙はし是れ簡率の人に在りて往々に見らるべき相なり辨舌は至つて爽かにして少しく興に入りて談論する時は滔々として懸河の勢あり學問の淺深は知るよし無けれども時に激昂して時事を論駁す

孤峯云此人是不易
與人後來爲何事未
可知恐爲此人篇中
應開一局面

るうちにも常に抜目なく言ひ廻はして先つ一條の走路を
開き、元目を押されぬ様に説き來る手段に長けたるを見れ
ば如何にも世故に煉熟して久しく世波の揺蕩せる間に其
身を漂はし人生の情味は嘗め盡したる人に見ゆ自ら言ふ
所に據れば宰相嚴嵩に忌まれて都に住み難く近ころ此地
に來れりと又常に苟安其他の官吏に對する談話にも暗に
時勢を誣るの意を寓せ亟相父子の專横を憤ふるの志を顯
せり官吏に對してすら斯くの如くなれば處士同士の間に
ては如何なる激論をなすや想ひやるべし楊雲は苟安の席
にて主人の紹介により初めて此人に面接したるが彼方よ
り最とも親しく物言ひかけ時事の談論より浮世の雜話に
至るまで快活の辯を揮ふて事に觸れては憤怒を現はし又

物に應じて怡悅を呈し甚と面白く語りけるに予頻りに耳
を傾けて其談話に聞き惚れたり此時許儀は楊雲が繼盛の
長子なるとも知り頻りに繼盛の朝に清名あるとを賛揚
し自ら其風采の慕はしく屢睡咳に接して教を受けたる由
を語り出て憂悶を帯ひたる音調にて楊雲に向ひ
今や在朝の人は悉く嚴氏の徒黨なれば尊大人の清聲は
反て其身を劈くの利刃とならんとを某深く悲むなり足
下にも注意ありたきとなり生面の某が斯く機密に涉る
とを申し出るも偏に大人を敬慕し又足下を親愛するに
出るのみ某の性質として情に逼まられては秘すべきと
をも兎角に言ひ出してならず
と語り出つるに楊雲も其人の澹泊にして兼ては父と面識

あり又深切に誠を込めたる物語を聞くにつけ一の益友を得たりと心に喜ひ厚く其實意を謝したりしが側に聴き居し荀安は固より可もなく不可もなき人物にて悪意とてはあらざれど事ある時踏み切りて正義のために犠牲となるべき勇氣あるもあらず其官に在るも唯々俸祿の爲めに應分の職務を盡して止むまでの覺悟にて心には嚴氏の專横を快からず思ふも其不快の情を眞面目の場合に打出言行の上にもれと表はすとは爲し得ざる人なれば他人が自家の面前にて嚴氏を惡しさまに言ふ場合にも其心は兎も角も其耳は何となく聴くを厭ふの有様なれば許儀は早くも其機を推して談話を他事に移しより此時耶按撫より使者來りて荀安を召しければ荀安は出て去り楊雲も許

孤豎云荀安爲人寫
出如親世間往々有
此種之人

儀に別を告げ旅寓に歸りけるが其後は許儀も楊雲の客舎に屢訪ひ來りて親しく語りけり抑も楊雲が家を出てより今日まで交りし新知の友には質直にして粗野なる馬忠、温良にして忠純なる孫遠、清秀にまて都雅なる魯英あるの、馬忠は義に勇み正に與するの壯士なれども學なく識なく動もすれば粗暴に走るをもて楊雲は常に保護者となりて其行を監督するの地位に立てり孫遠は才學なきにあらねど時勢に對して率先自ら任するの勇氣は齡と共に消磨し去り唯純然たる老郷紳の儘かに生氣を保てるに過ぎず加ふるに其父の執にして坐さるときは席を譲り行く時は路を譲るべき人にしあれば互に胸襟を披ひて談論するの交誼にあらず魯英は才あり識あり氣概ありて未頼もし

又云三人性格有三
様性格寫來宛然如
親其人

孤峯云反復委曲筆力縱橫

又云一轉有力

き少年ながら締交の初めより活潑なる精神も憂愁に鎖されて外に顯はるゝとなく楊雲は唯之れを慰藉し獎勵するの地位に立ちたれば世務に就き時勢に對して互に所見を吐き所思を演へて犄角の談論に快辯を闘はし雌雄を政論の上に争ふ等の快事なかりしも今此新交の友は頗る朝野の事情に通し非政を論駁し暴制を斥くるの議論は痛快にして剴切なり殊に世故に煉熟せる人の慣ひとして對手の好惡せる要點を幾微の間に推知して巧みに自己の所論に持ち込み對手の議論をして己より出てしむるが如き伎倆を用ゆるに長けたれば許儀と共に談話するときは楊雲は常に膝の前むを覺ぬす佳境に入らざるとなし然れども其議論は楊雲をして常に雲霧を隔て、前峯を望むの感を生

孤峯云欬々叙述至此段見其意

又云更描一表人物來讀者眼益忙

せしめたり其故は許儀が時勢に對して破壊の説を主張する如何にも剴切にして爽快なれども如何して此民を濟ひ此國を治むべきやの大本に、遂お論鋒を向けど究竟すれハ唯彼ノ物ハ惡シ宜シク之ヲ打破スベシといふ丈の區域に於て縱横談論するに過ぎず是れ楊雲の未だ満足せざる所なるが兎に角に是れ迄接せし人の中にて最も壯快なる人物なりと心に賛し奥底なく語らいけり一日許儀ハ楊雲の許に來り話の序に言ひけるハ某が親友に祖祐字ハ安國と呼ぶものあり其遠祖ハ晋時豫州の刺史となり渡江の舟中に千古の感慨を留めたる祖遜其人にて州城の内外に隠れなき清族なり其父の代までの富豪の名高かりしが彼が家を相續する頃ハ大に其財産を失ひ今ハ貧しと云ふ

にあらねどもまた富めりとも云ふべからず然るに此人清
 廉にして學識才幹世に超れたる人物なれども生得深沈剛
 毅にして喜怒色に顯れず寡言にして用ある時の外語を
 發せざされども慷慨として大節あるはおさく遠祖に劣
 らず祖先以來施を好みて惠恤を所在の人民に加ふたれば
 名望も甚た高し足下若し志を天下に成さんと欲せば此人
 に交るに若かずと懇ろに推薦しければ楊雲の大は悦び某
 はるく都を出て、遍く天下を歴遊するに此等の友を得
 んが爲めなり願ふに速かに紹介あれと渴望に堪へざる有
 様なれば許儀の直ちに領承けて楊雲を伴ひ祖祐の家に詣
 り名刺を通するに主人の立ち迎へて廳前に請しけり家屋
 の結構の宏壯ならず華美ならずされども尋常人家に立ち

孤豸云求友一事楊雲本意

又云其人其家如此寫出更覺橫溢

優りて楚潔なるも其室内に施したる裝飾の流石に世族の
 名残を留めたり蓋し其家屋の宏壯ならざる割合に、構内
 の至つて廣潤き模様を見れば家産の減落するに随つて母
 屋子舎を取り縮め園地等を殺いて新たに耕地を宅地内に
 開きたるものと思はる三人坐定まり許儀の先つ笑釋して
 楊雲を主人に紹介せり楊雲の寒暄を叙へ了りて主人を熟
 視するに年紀三十計り其容貌は魁偉にして豐眉隆準鬚髯
 美にして威容堂々たる風采は宛から畫ける關雲長に肖た
 り凡る人の氣象膽識は多少其相貌態度に現はるもの
 て初見の人は互に其相貌を見て先つ其人物を推察し然る
 後敬愛の情か輕侮の心か二ツに一ツ互ひの間に發動する
 も人情の常なり祖祐の相貌は何人に似れ初見の時に最も

又云遙然把談論掃
 記事中是作者得意
 筆法

價値を現はすやうに出来たれば楊雲も初對面に於て前きに許儀が己れに告げたる褒語の偽りならざるを先づ其相貌にて認識せるのみか猶一層踐み進み果して是れ一個の英傑なるべしと坐るに敬意を生したり許儀の言ひしに違はず如何にも沈黙にして靜着許儀が例の調子よき談話をば時々笑容にて迎ふるのみ新知の友に對しては二三回寡言の問答をなしたるのみ其後は暫し詞も途切れてありし此間主人は黙坐し許儀は楊雲に對し數回の問答を挑みけるが楊雲は已むを得ず簡單に對話なしけるに祖祐は始終楊雲の應對に注意してありしが二人の談話も果てたる時は其眼光は正しく楊雲の双眉相會する顔の正面に注射し居たり楊雲が相手と話を終りて更らに主人の方に振り向

木堂云一句抄終

きたるに心附きてや俄かに其視針を轉したり往きに主人は蒼頭を呼ひ何事をか命したりしに何時の間にか杯盤は卓上に列り美酒佳肴の香氣は几案を掠めて來るに予主人は客に笑釋しつ先づ楊雲の手を取りて上坐に請するに楊雲は固く辭して其席に就かざるを許儀も傍より勧めけるに困じはてつゝ坐に直れば各席を定めけり斯くて主人は頻りに杯を侷めて客を饗應しければ何れも醉を催ふし談話の調子も自然に高く笑語交々興を添へ一坐の和氣滿堂の春風賓主互に打ち解けて談話に時を移しけり何れも酒量は無優無劣暫しは杯酒の争ひなりしが許儀が得意の談鋒は愈々鋭く四面に當り今は唯狂する如く現朝廷を攻撃して遂に嚴嵩父子の事に論じ及ぼし

嚴嵩の姦は梁驥に譲らず李林甫に劣らず秦檜に降らず
 梁驥國柄を執ると十九年李林甫も亦十九年秦檜もまた
 十九年皆天子の威を挾んで其私を營むものなり其爲す
 所殆んど一人に出るが如し深く宦官宮妾に結びて己れ
 の脚跟アキカを宮中に立て而る後其指揮を定め唯己れの言ふ
 所のみ主上の耳に入らしむるの術を施し利を懸けて數
 多の徒黨を誘ひ之を宮中に養ふて要地に散置し一は以
 て君主の聰明を蔽ひ一は以て外より己れに抗するもの
 を防ぎ詭計詐術至らざるなく君子正人獨力之れに當る
 と能はず正義を執るの名士意氣相投して之れを論撃す
 るときは直ちに朋黨を以て之れを目し天下の名士を網
 羅して悉く撲滅せんとす抑も人の尊信は實權の歸する

孤豈云議論偏偏固
 能動人

所に集まるものなり君主常に深宮に在りて外事に關せ
 ず其實權臣下に移るときは人皆其實權の在る所を尊信
 し遂に君主あるとを怠れて全く姦臣の奴僕となるに至
 る近日嚴嵩の所爲を視るに内外百執事の建白奏議する
 所のもの總て先づ己れの手を受けて之を取捨し己れに
 害なきは之を上聞し己れに利あらざるものは棄却して
 上聞せず嵩が内閣に入りしより副封凡テ上書スル者皆
 二通ヲ具フ其一ヲ
 副封ト唱へ執政先ツ之ヲ開封シ善ナレと苞苴とは交も
 バ之ヲ奏シ不善ナレバ屏ケ去リ奏セズ
 其戶外に輻湊せり試に見よ嵩執政となりし以來凡る十
 年前後嵩を劾するもの二十餘人に及べり嵩は無事なる
 のみか其威權は日に加はり劾するものは皆な罪を得た
 り

と一層調子を張りあげて論辯するに予祖詒は急に押し止めて

靜かに話されよ、穩かに、今鄴按撫州治にありてシ、ヒ、メ、ク間諜、視察

嚴重なるは足下も疾くに知るとならずやシカ、ニ、ミ、ナ、ラ、ス加之今度知縣

其他の官吏を會合したるは朝廷に抗議する諸名士に黨

人の名を附しておし片附けん目的なるも足下の夙とに

知るとならずや壁に耳ある危険しき世の中慎みに慎み

を加へても免かれ難き折なるに

と窺められても猶ほ止まず

彼郡奴、彼は權門の犬なり

と言ひつゝ、少し聲を潜め

時勢の有様は恰かも後漢の末季に似たり天下の名士四

孤峯云謹厚君子之態度

方に偶語し共に其類を集め各其志を遂げんとす此時に
乗して功名を成さすんば將た何の時を期すべき

と言ひ出つるを楊雲は聞き咎め

餘人は知らず某は世の亂るゝを幸として自家の功名を

遂げんとの志念を抱くものに非ず某實に民を水火の中

より救はんどもざるの志あり國を泰山の安きに置かんと

ざるの望ありさりながら是れ自家の私にあらず國を愛

し君を思ふの公義によるのみ若し在朝の諸公にして自

ら其非を悟り禍亂の機を察せられ善に移り正に就き民

を濟ひ國を安んせば吾曹は樂んで其澤に浴し太平世界

の逸民となりて耕漁に一生を終らんのみされども朝政

に改革なく姦臣益専横を極め禍亂の機此に發して順に

孤峯云議論堂々無限感慨善描寫足以補世道

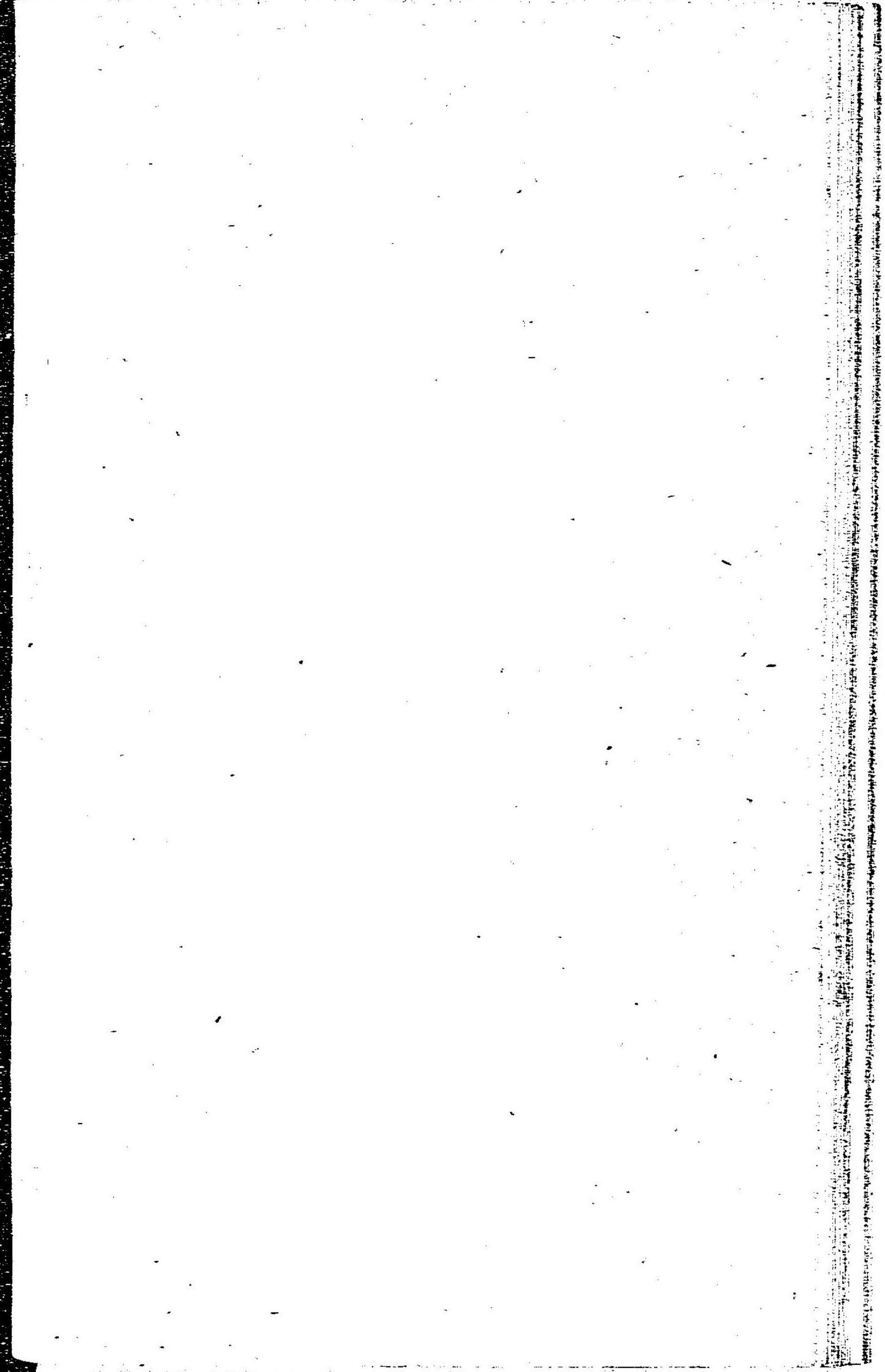
溪龍曰く、青天白日男子の心、讀者國字をして更に潤如たらさむ

治るの道を得ず遂に逆に鎮するの必要あるに及び吾曹若し諸名士と濟民の事業を遂ぐるあらば實に國家の不幸なり吾曹は之れに依りて名を成すを得るも亂より治に回るの間民の痛苦國の疲弊は如何ならん吾曹實に濟民の志ありされども此志は民の苦しむによりて生ぜり民若し初めより樂まば吾曹豈此志あらんや願くは吾曹をして太平の逸民たらしめよ

と思ひ入りて述べけるに予祖祐は膝を打つて歎稱し説き得て妙なり論し得て切なり某とても其志に外ならず惟ふに許君の心術も共に此に在るならん唯失望の餘りに過激に陥りしものなるべし兩君とも暫く談話を留めて今一盞過こされよ

思軒曰祖安國學止
護爾時插數語亦自
然深沈使人垂起器
重之意

と主人の勸めよ各々重ねて杯を取り主客酔を盡し夜に入りて歸りけり



第十三回

巨源廣大千尋海
叔度汪洋萬頃波

細雨蕭々として夜正さに深し孤燈の下に對坐して互に心事を語りつゝ或は憤怒して腕を扼え或は嗟嘆して聲を呑み又時に笑壺エツボに入りて共に膝の進むを覺えず傍目ワキメもあらず話し居たるは是れなん楊雲の客舎に祖祐ソウゴの訪ウラヒひ來りて二人互に前途を計畫すると知られたり祖祐は楊雲に打ち向ひ

貴殿に初めて對面せしより今に到りて僅かに四五回に過ぎず其結交は甚だ淺きも交情は極めて深しと信せり某は一見して既に舊識の思ひあり白頭まで新の如きは世間一般交遊の有様なり某も十數年來交はる所多しと雖も未だ胸襟を披いて心を談ずると君に於けるが如き

はあらず今又君が孟軻子の心髓を抜き取りて濟民の一義を主持し以て爲政の根據と定めたる卓識高見は實に敬服に堪へず齡ころ僕は兄なれ才識に於ては我は御邊の弟なり今より君に兄事して共に志を立つべきのみと祖祐が深く推尊する辭に楊雲は困じはて額の汗を拭ひながら

貴殿の稱賛は分に過ぎたり古人も人の相知るは心を知るを貴ふと云へり貴殿幸に某を知心の友と思召さば今より驥尾に附て共に志を談すべし先つ何よりも貴殿に承はりたきは許儀のとなり彼人は昨日も苟知縣の許にて出會ひしが何時も變らぬ機嫌にて雄辯を振はれたり貴殿は舊識のとなれば其出處進退をも知りしならん終

始渝らず我々と事を共にするの人物なりや如何

と他事なく問へば祖祐は微笑

彼人は足下に取りては某よりも舊識なるに其爲人^レを某に問はるゝからには足下の心裏に幾分か疎隔あるに非ずや若し然らんには故らに爰に問題として其身の上を論ずるは餘り快き^{コト}にもあらず

との答言は如何にも長者の口吻にて問然すべき様もなく楊雲は黙然として唯其心に感ずるのみ暫くありて歎息しつゝ言ひけるやう

貴殿の言を慎みて苟くも發言せざるは殊に及び難きとにこそ其に附けても某は無用の辯を費やして益なき争を買ふとあり既に昨日も苟知縣の席に於て覺るす失言

孤豎云方高談瀾論
又將叙事作餘波

したりしが今更思へばこれらまた怨を結ぶの種ならん
 祖 何事を言はれしや苦しからずば語りたまへ
 揚 勿論許儀も同席にて知縣が其身牧民の職に在るも之れ
 に適當する威權なきゆゑ盜賊蜂起して白晝市街を往來
 するも之を制壓するの力もなく爲めに騷亂を大にし遂
 に天下の大患を成すに至る現在處士横議して黨人の萌
 し現はれしとて慙々朝廷の顯官を州治に臨ましむる如
 き煩ひを惹き出すも畢竟牧民官限りにて宰理すべきの
 威權乏しきによる旨を説きし處許儀が頻りに其説を稱
 賛せるゆゑ某は知縣が其職任の根本を誤りたるを忠
 告する心にて柳宗元が薛存義を送れる序文を引き凡る
 土に吏たるものゝ職分は本と是れ民の役にして民を役

孤聖三引柳子議論 設起極也

するのみに非ず凡る民の其土に食むものは其什一を出
 して吏を備ひ平を其人に司らしむるに彼の値を受けて
 備れざるもの往々其事を怠るもの多志云々と陳へて其全
 文を一誦し其全文ハ固ヨリ著名ノモノニテ人能ク之レ
 河東薛存義將行柳子曰凡吏於土者若知於職乎蓋
 之江役非以食之且告曰凡吏於土者若知於職乎蓋
 民之役非以食之且告曰凡吏於土者若知於職乎蓋
 一皆然吏唯司平於我而盜今受其直於事者天
 下直然若事又盜若貨器肆其怒甚而黜罰之矣不
 若天直下多類此而理同奈敢肆其怒甚而黜罰之矣不
 同也勢不義而理同奈敢肆其怒甚而黜罰之矣不
 而畏乎存不義而理同奈敢肆其怒甚而黜罰之矣不
 勞也訟者平賦者均老弱無懷詐暴僧其爲不虛取
 直也明之矣其於其往也故賞以酒肉而重之以辭
 元來民ありて國あり國ありて之を傷ふものは取りも直
 あるのみ民は即ち國の本にて之を傷ふものは取りも直

さず國を傷かものなり若し能く事を怠らすして民を愛
 撫し其身に受けたる直に相應するの本務を盡さば争で
 一揆の起るべき争で盜賊の徘徊すべき苟公の如きは固
 より論の外なれども柳子が所謂又従つて之を盜むとい
 ふもの無きにあらずされども家に備へる傭夫を傭主が
 處分する如く容易く之を斥くると能はざるは即ち勢の
 同じからざる所以なり已に之を斥くる能はざるゆゑ疾
 苦を積み艱難に堪へず恒産を失ひ恒心を喪ふて遂には
 匪徒と變するなりされども其本を尋ぬれば皆純粹の良
 民なり此良民を驅りて遂に盜賊に變せしむるは其罪何
 れに在るや若し今日の有様にて移り行き政法の大体を
 改めずして徒らに牧民官の權威を増さば其害今より一

孤峯云此一段是本
 篇主眼楊雲精神即
 在此作者精神即在
 此議論深以客形主
 甚有風趣

層大ならん云々と論辯したるに苟知縣はいと不興氣に
 見ゑたるに某も心附きて此に議論を止めたり然るに許
 儀が某に對し柳子厚は正路を誤まりし逆臣なりとて其
 王叔文に徒黨して刑に處せられしとを挙げ柳子の邪説
 取るに足らざる旨を高言せるゆゑ某も黙する能はず之
 れに抗論して柳子の爲めに冤を雪き范文正の説を引て
 之を證せしかば許儀の舌鋒は稍鈍りしかと猶頻りに辯
 疏して柳子の此説は中正を失ひし詭激の論なり君臣自
 ら其分あり君の命じて其民を牧せしむるの有司は即ち
 君を代表せるものなり争で民の傭人を見做すべきと論
 せしかば某も大人氣なしとは思ひつゝも時の場合已む
 を得ず之れを駁して今彼我の争ふ所は天下の公道人事

龍溪曰小説にして其事、歐米に係る者は済民の主義を引用するに極めて容易なるの便あり、東洋に至ては古來の徳教、稍や其趣を異にす今作者則ち君主義を以て之を東洋の舊天地に擬し「民は天を代表す」の意味を發見し來り以て民權、自由等の語に當つ是等の伎倆、獨り之を深く東西の史書に通ずる者に求むべきのみ

の正理を判別するに在り固より君は尊く臣は賤し吏は上にして民は下なるは國家あり政法ありて治を施し治を受くるの區別ある以上實に止む可らざるの秩序なり此等は固より言ふまでも無けれども其は事理を論ずるの上に於て我邦に行はるゝ正道を指示せる亞聖孟子の説に依り民は天を代表するものなりと明言せんと存するなり
祖
何に天を代表すと言はれしや
然り天を代表すといへり古より聖賢民の望を得て天下を統一する時命を天に受くと云ふ天とは何ぞや彼蒼々たるものを云ふか決して然らず昔萬章孟子に問ふ堯以天下與舜有諸曰否天子不能以天下與人然則舜有天下也

思軒曰昔歲余在山塾與同學論此章余謂朱子以行事二字繫諸舜是甚謬焉下節所謂天受之天之行也民受之民之事也行事二字乃不出此總之終歸於百姓矣則與論公議也否者天觀天聽兩句將何處頂坐來同學皆笑余放言而余頷然自守也

孰與之曰天與之天與之者諄々然命之乎曰否天不言以行與事示之耳と説明し更らに其意を敷衍して終に書の大誓の本文を掲げ天視自我民視天聽自我民聽とは則所謂天與之義なりと論結せり朱子は之を釋して天は固より無形なり其視聽を皆民の視聽に從ふといへり是れ即ち民は天を代表するものにあらずして何ぞや又詩の文王の篇に殷之未喪師克配上帝儀監于殷峻命不易と大學に之を釋して衆を得れば則ち國を得衆を失へば則ち國を失ふの謂なりと説けり峻命は天命なり衆は民衆なり已に天命といへば必ず民衆の之に附從すると猶影の形に於けるが如し聖經賢傳天を民に配して説くと極めて分明なりと論議に時を移しけるが許儀も其後の返答せず

其坐も興盡て見おければ嗚呼我ながら言ひ過せしと心
附かぬにあらねども騎虎の勢已むを得ず辯を好むに似
たれども遂に此に及びしは悔ゆども及ばぬとなりき
と其時の顛末を逐一告げてさて言ふやう

前に述べたる愚見につき貴殿若し非なりと思はし争て
教示を垂れたまへ世の嫌疑をも打ち除れ奇説を立てし
人を憤怒せしめしは今更思へば愚昧しかりき

と言ひさしてホット一息吐きたるは蓋し祖祐の爲人に其
性質を比較して耻ずる所あるに似たり祖祐は益々感歎し
て

人各其賦稟を異にするゆゑ某の如き訥辯なるもあれば
足下の如き能辯なるもあり足下は孟軻の精神を真け得

孤登三措詞婉曲

て生れしのみならず孟軻の辯をも併せて天より賦與せ
られしなれば其能辯を使用するは固より天賦の真性に
随ふものにして天の然らしむるものと云ふべし某の如
きは天唇舌の能を吝んで賦與せられざるがゆゑ此官能
を充分に用ゆると能はずされば人は各其性に随ひ其能
によりて働くの外なし某決して足下を學ぶ可らそ足下
亦某に倣ふべきにあらず足下の能時に利あるとあらん
又害あるとあらん某とても亦然り寡言の時に利あるを
知るも又時に害あるを見る此等は一概に論すべからず
且其時の場合に於て黙すべきにあらざれば覺えず過激
に渉るも亦己み難き次第なり其れは兎も角も足下が天
を民に配して説破せるは高尚にして且つ新奇の論なれ

孤琴云祖安國一言
正而大重如九鼎大
呂

ば俗人の解了すべきとはあらず某不敏と雖も常に其
意義を心に蓄へたれども足下の如く議論に引き纏めて
他人に説明するの能なきを如何せん足下の議論過激に
は似たりしかと到底志す所を行はんとせば其志の本源
たる道を主張せざるを得ず諺にも云ふ如く畏首畏尾身
所餘幾何と苟安は平庸の人なり許儀は快活なりよも怨
を醸すとはあるまじ

と慰めつゝ夜も深けたれば暇申さんと別れて家に歸りけ
り

易州は古より名勝舊跡に富みたるは前にも己に述べたる
如く五華樓(燕侯の)候臺(傳へ云ふ周の武王の築く所戰國に
樂の地)仙臺(燕の昭王が築きたるものにて千金を臺
となす)黄金臺(燕に置きて天下の士を延きしゆる名け

又云原詩固傑作次
韻又奇麗

り(た)の名跡あり殊に吟詩臺は大寧山にあり五代の時馮道が
詩を此に吟せしより吟詩臺の名あり元の劉因の詩に

林。堅。少。佳。色。風。雪。有。清。秋。爲。問。此。山。靈。吟。臺。何。久。留。時。危。亦
常。事。人。生。足。良。謀。不。有。撥。亂。功。當。乘。浮。海。舟。驕。々。扶。搖。子。脫
屣。雲。臺。遊。每。聞。一。朝。革。尙。作。數。日。愁。朝。廷。乃。自。樂。山。林。爲。誰
憂。視。彼。昂。々。駒。奈。此。泛。々。鷗。四。維。既。不。張。三。綱。遂。橫。流。坐。令
蚩。々。民。謂。茲。聖。與。儔。蚩。々。尙。可。恕。儒。臣。豈。無。尤。不。有。歐。馬。筆
孰。能。回。萬。牛。大。行。千。萬。里。瀟。洒。積。中。洲。今。朝。此。登。臨。孤。懷。漲
巖。幽。何。當。到。疊。嶂。一。洗。他。山。羞。

此詩は人口に膾炙して當時を感慨せる極めて切に取分
け楊雲等の今の身に思ひ寓するとなきにあらねば猶數日
燕に留まり吟詩臺に遊んで我もまた山靈に向つて孤懷を

暢んものをも思ひ立ち直ちに杖を曳き坐るに興を催ふして劉因の詩韻に次し壁に題せり

高士志如許。高臺幾春秋。高風已不作。遺跡空存留。悠々思古人。蒼生誰爲謀。巨川不可濟。安用楫與舟。我羨臺中人。飄然物外遊。高吟寄懷抱。一洗古今愁。搔首仰星晨。心忤々如憂世路。風濤險。人生似浮鷗。丈夫生未生。須挽狂瀾流。不追屈陶跡。胡與巢許儔。區々朱紫輩。覩顏同效尤。名利競驅軋。趨炎如火牛。樂土何處在。翹頭望中洲。處士多苦節。生涯南澗幽。濟民無奇策。常爲烈士羞。

斯くて數日を経るうち鄧懸卿が黨人の名を構造して志士を取り押へんとする密謀も零ぼ分りしかば州治の間に久しく淹留すべきにあらず暫く彼等の氣焰を避けんには更

らに杖を幽靜の地に曳き一時縁を世と絶つに若かず祖祐にも勸めて共に山林を徘徊し前途の計畫を定むるに若かずと心に深く信せしかば直ちに旅裝を整へ兼て父より譲り受けたる寶刀を帯ひ旅舎の價を償ひて立ち出んとする時不圖祖祐に出會ひたり祖祐が例に似氣なく急き込みて頻りに楊雲の袂を引きて物をも言はず引き摺り行くに不審ながらも拂ふに由なく仔細あらんと思ひつゝ引かるゝまゝに後に隨ひ凡る十五六町も走りし時祖祐は一叢茂りたる森林を指し此處にて密談をせしと楊雲の手を握りしまゝ共々林中に馳せ入りけり此叢林は平地より段々と登りたる高臺にて州治の郭外にありて光風岡と名けたる勝地なり往時は光風寺と呼へる巨剎ありしが前年此邊盜

オホテラ

賊蜂起して州治を掠めし時賊徒等は此寺を一時屯營とな
 したるが其後官軍に敗られ寺に火を放ちて逃げ去りしに
 より流石の大刹も灰燼に歸せんとしたるに軍士等の馳せ
 付けて火を救ひしにより殿宇の半ばを焼きしのみ左れを
 も是れより廢寺となりて綠林の巢窟に委ねたり時方さに
 四月の初めに當り殘花猶餘芳を留めて春の去らんとする
 を惜み綠樹稍く陰をなして夏を迎へんとするに似たり二
 人は此に來りて頼りに渴を覺るれば樹間より流れ來れ
 る溪水を掬して喉を潤ほし但見れば斜めに傾歎きたる山
 門あり其上に抹朱の額を存し光風寺の三字は剝蝕ながら
 僅かに金紛の餘光を留めたり二人は之を瞥見したるのみ
 直ちに寺内に進み入るに鐘樓は倒れて瓦片地に散じ經堂

孤峯云叙事精紙廢
 寺光長曲盡畫圖所
 不及

は朽ちて碧苔を生じ荆棘に頸を纏はれたまいたる釋尊は
 泥土に膝を埋めたまふ觀世音と相對して悲泣するに似た
 り帝釋は元を喪ひ羅漢は足を損し香厨は鴉の棲所とな
 り方丈は狐兔の遊園に委す如何なる急遽の場合と雖も身
 を置くべきの處なければ樵夫なぞの時々憩ふ所にや蓋の
 如く四邊を蔽へる大樹の蔭に數箇の大石ありて清く苔蘚
 を掃ひ椅子に代ゆべきものありければ是れ屈竟と二人は
 腰打ちかけてホット一息此時祖師は楊雲の顔を打ち睇も
 りいと威める面色にて
 足下は未だ知らざるべし重ねくの災厄は正に足下に
 纏ひ附きたり斯く斗りにては解るまじ耶悉卿が此に臨
 みしより某深く意を注ぎ普代の忠僕郭恩といへるもの

を間諜となし苦計を用ひて彼等の様子を探らせたるに未だ然るべき便りを得ず心頗りに急焦イサシちしに今朝未明に郭恩遠て、馳せ歸り今日足下を逮捕トウせるの命を發するに決せしよし某をも共に逮捕せるの筈なりと是れ全く足下の父御が京師にて姦徒の爲めに中てられ貶せられたる報告の邸奴の許に達せしより彼等の決心を急めしなり

楊祖

ナニ父上が何とせし

父御には大保仇鸞が俺答の互市を許さんとするとに就き上書して其不可なる次第を極諫したるに執政嚴嵩仇鸞を助けて遂に父御を錦衣衛の獄に下し狄道縣典史に貶せしよし父御若し官に在さば足下に對して猶ほ手を

龍溪曰く作者未だ楊子に至難至險の地に陥れずして唯其の順境を見ず今少く其の逆境を試るの時至る、

下だし得ざりしならんが此一報は直ちに彼等に機會を與へ種々の惡名を附して我等を逮捕するに至りしなりと言ひ終りて歎息し四邊アタリに眼を配り居たり楊雲も亦嗟嘆し

父の剛直にして濁朝に立つ、早晚禍を免れまじと某深く苦慮せるゆゑ出立の其節にも切に御諫め申せしも隨ふ氣色あらざりしが果して禍に罹りたまへり左れども貶竄に止まりしは不幸中の幸なり是れ將た悔て詮なきとなり目下の緊要は我々の身を如何すべきやの一事なり三十六計走るに若かず足下は別に高案ありや斯く急遽の場合に處しては智も之を謀るに窮し勇も之れを斷ずるに苦む深謀遠慮は急遽の場合に説くべから

楊祖

孤峯云自然忠僕真
惡

す唯目前の急に對して一時の計をなさに若かず逃るゝ
丈逃れし後また其前途を計るべし
と話の央ばに一人の壯漢息急き切りて馳せ來り嚙み付く
如き聲を揚げ
爾公なとて大膽なる捕卒は早くも楊相公の寓居に向ひ
御家も敵に圍まれたり此處等に猶豫して在らんには忽
ち敵の擒とならん
と言ひも敢へず旅包と路銀を放下し出だしつゝ高き丘に
かけ登り樹林の隙より敵や來ると窺ひ居たるは言はずと
知れし郭恩なり楊雲は突と立ちあがり
奸徒等斯くまで我々に逼るは是れ天我々に膽識を煉磨
するの地を與ゆるならん

孤峯云志士用蓋亦
周密

と言ひつゝ小包を緊と纏ひ彼の寶刀の袋子を取り除けい
ザ共々に祖祐の方を願れば祖祐は猶坦然として坐を離
れず懷紙を取り出し何事をか細々と認め居たるに楊雲は
歎稱し
祖 祖君の膽は天の如し 祖 足下の語も亦壯なり
と言ひつゝ起つて彼書附を細小なる箱に秘め己れが坐せ
し石の下を深く穿ち件の箱を差し入れて上より土を蓋ひ
ながら楊雲を見返りて
楊君これを怪みたまふな某と同志の士猶ほ十數名此地
に潛めりこれ此石の清くして苔蘚なきは我々折々密會
して屢磨擦したるよよれり我若し事ありて此地を去る
とあらんには必ず此に書を遺して後事を托さるの約束

あり夫故斯くは計らふなりさるにても許儀の身の上彼
れも決して免れ難き人なるに

楊雲は祖祐の遠謀と其用意の縝密なるを深く感じ近く寄
りて

孤峯云許儀與知一
語亦有關係後段

楊 許儀も件の秘書のとを與り知れるものなりや
祖 否々彼れは昨今の知友なり

と言ふ時郭恩は馳せ來り

兩君なぞて遲疑したまふ州城の南門より一群の人馬駈
け出で二手に分れて西と東郊外さして寄せ來るは捕卒
の報知によりて逃走を悟り早くも討手を向けたるなら
ん疾く走りたまへ逃れたまへ
と聲振り絞りて勸むるに予祖祐は手早く半弓を携ゑ

イザ楊君路次の案内は其諸せり此方に來ませ

と伴ひつゝ樹林に分け入り捷徑を辿りて前きに進めば楊

雲直ちに之れに次ぎ郭恩は四方に眼を配りつゝ後殿を予

なしたりける時に嘉靖三十年四月初めの十日祖祐を始め

楊雲郭恩只走りに路を急ぎ凡る五六里も走りしかば今は

少しく心安着て徑間の細流に喉を潤ほし郭恩が調へ來り

し乾飯を食しながら少しく歩を緩めて行きかゝる前面の

茂林にて馬の嘶く聲するに予楊雲早くも目を注げて

我々が走るとの疾きを知り歩卒にては取り逃すとあら

んど深くも計り騎兵のみ前きに廻はして此に待ち伏せ

したりと覺ゆ用心あれ孰れも、、、さても不便の

地勢なり路は一筋左右は深溝

と言ひも終らず十騎餘りの騎兵の早くも樹林より顯はれ
 出て前に立ちたる一人が大音あげ叛賊遁ぐとも遁さんや
 我々鄧公の命を受け疾くより此に待ち受けたりと呼り
 て或の棍棒又の又手股等捕手に用ゆる種々の武器を振り
 舞し我一番に搦め捕らんとひしめきけり祖祐の何の辭も
 かけず携へたりし半弓に箭を打ちつがふて引きまほり弦
 音高くきりて放てば前なる一騎は喉を射抜かれ眞逆様
 落ちたるに驚きながらも多勢を待みソレ遁すなと競ひか
 るに郭恩も亦弓に箭つがひ左りの方なる騎馬武者を物
 の見事に射落したり此有様に討手の勢の暫し猶豫居たり
 しに祖祐が二の箭の右に立たる一名の乗りたる馬の額に
 中れば馬の忽ち躍り狂ひ騎手と共に堂と倒る討手の愈周

孤筆云叙事精巧筆
 力自在

忠野曰馬屬斬馬人
 屬斬人只與他做甚
 麼斬法即與他做甚
 麼寫法

章し廣くもあらぬ路なれば馬蹄にかけて踏み潰さんど皆
 一齊に鞭をあげ此方を望んで馳せ来る其疾きと風の如く
 路の一筋左右の深溝祖祐主従の神箭も其用已に盡き果て
 たり此時までも手を下ださず敵の動靜を視て居たりし楊
 雲が腰に帯びたる一刀に手を掛くるよと見ゑたるが秋水
 三尺早くも馬前に閃きたり駈け来る馬の無我無心踏み出
 す脚の地に着かずアワヤ楊雲の頭上より踏み碎かんす勢
 なりしが如何のしけん楊雲が斜めに其身を欹て地に倒
 るよと見る間も遅し一聲嘶く馬と共に前に進みし二人
 の騎手の早くも溝に陥りたり茲又一條の血路を開き祖祐
 主従馬蹄を逃れ吐息つく間もあらばこそ續いて駈け来る
 二騎三騎此の如何して禦かんと祖祐主従左右に開けば楊

雲の突と寄りて身構へする間も、荒ら馬の額を目がけて斬り込まながら一闘り飛びさる、至妙の捷技、希代の寶刀、馬の眞向を断ち割られ、斬きも得て倒れけり、其間に残りし騎馬の四散、今三人が來りし方へ一目散にかけ抜けたり、生死の相合、焦眉の際、他事に心の移らざる危急の瀬戸に臨みながら、祖祐主従の手を拍つて、感歎の外無かりけり、楊雲刀を室に納めて、祖祐主従に打ち向ひ

最前よりの戦に頗る時刻を費やしたれば、今逃げ去りし騎馬武者等が後より追ひ來る步兵と合して、間もなく此に來るべし、此處は防禦に不便なり、地の利を謀りて、今一度敵を惱まし、落ち延びん、イサ共々に
と勸むるに、祖祐主従實にも同意し、南を望んで馳せ去

孤峯云勿忙中忽寫
出山川景致何等筆
力何等工夫亦似
畫妙絕奇經

りけり斯くて三人は路を急ぎ新戰場を去ると、凡る十里計りにして山水の極めて明媚なる處に、其身を見出した、日も將に暮れ、なんどして山影は深く沈み、樹陰は稍く暗く、堤上の林杪には僅かに殘陽を留め、河邊の楊柳には猶ほ牧牛を繋きたり、斷霞水に落ちて紅ひに暮煙野に横つて、青し、漁翁は棹を移して、何れの處にか去り、牧童は笛を止め、前村に向て歸る、眼中の光景、宛がら一幅の畫に似たり、尋常の行旅ならんには、筈を留めて此風光を賞すべきに、今此に來りし三人は、心情を山水の中に運ぶの騷客にあらずして、生死を鋒鏑の間に争ふの戦士なるを如何せん、風聲鶴唳も追手の兵かと怪まれて、屢後へを顧み、又前面を望み、左右を眺め、見る物聞く物に心を置いて、路を行き、龍跡山の麓路近き荒村に

來りし時遙かに望めば東北の方より歩騎并せて百人餘り
此方をさして臺地に馳せ來るは討手の兵と知られたり祖
筋は四邊を見廻し

祖 此邊の地勢は極めて躬方に便なれども己に二三十里を
走りて疲れたるうゑ敵は大勢の新手なり所詮防禦は覺
束なし兎に角禦や丈禦ぎ止め龍跡山に分け入りて暫く
影を匿せし後兼て約せし孫公の許に赴くべし此れハ三
人已に道すから約束して一先此に到らんとする目的な
り

と言ひければ楊雲も同意して敵の追ひ來ん間に兵糧を用
ゆべしと郭恩の用意せる肉餅乾飯等を喫し暫し休らいし
後各大樹を楯に取り僅かに三人の躬方を以て百騎に餘る

敵兵を防ぎ留めんと待ちかまへしは大膽不敵の舉動なり
日もはや全く暮れはてい煙に咽ひし澹月は隠るに郊野を
照らしけり夜に入りしころ屈竟なれと三人三方に立ち分
れ各半弓を携へて先づ遠箭にて防がんと語らふ折柄敵は
眞近に寄せ來りしも最前の手練に懲りてや左右なく進ま
ず暫くありて槐樹の蔭に人影あり敵は僅かに三人なり進
めや進めどかけたる聲に咄と喊いて押し寄せけり箭距路
を計りて三人が射出す獵箭に空矢なく群れ寄る兵士の胸
板喉元處擇ます射抜きたりされども多勢の討手なれば兼
て用意せる松火を振り照らし前なる兵士を楯よして早く
も逼り近けば楊雲は例の一刀を抜き斬りて出でんと
する折柄後の方より鼓を鳴らし喊の聲を擧げて一彪の軍

馬襲ひ來るに今ははや敵し難し逃るゝ丈けは逃れて見んと
 樹間を潜り馳せ廻り追ひ來る敵を斫り倒し彼方に走り
 此方に遁れ一足上りに龍跡山に分け登るに不思議なる哉
 前なる敵は今後へより來りし敵と出會ふや否箭を射出し
 戈を交へ喊き叫んで戦ふさまは同士討とも思はれず此時
 楊雲は祖祐主従を見失ひ血刀を提げたるまゝ小高き處に
 直立て取鬪の模様を打ち眺め只管疑惑に堪へざりけりさ
 ても双方の軍兵の入り違ひ駈け違ひ火花を散らして戦ひ
 けるが楊雲等の前面より追ひ薄まりし敵は後方より起り
 一兵に斫り立てられ散々に敗北して逃げ去りければ勝を
 得たる兵士等は敵の軍器兵糧餘まさず分捕なし此方をさ
 して寄せ來るに楊雲は不審晴れず只茫然としてありける

龍溪曰く經國美談
 志士、瑪留の擒れ
 を救ふの一段、余
 自ら其の水滸志に
 似たる所あるを憶
 らむ、今此一段亦
 た宛然たる水滸志
 なり、鳴鶴兄の才
 藻を以て尙ほ且つ
 斯の如し著作踏襲
 を避るの難き一に
 此に至るか

に松火を高くふりかさして前に進みし兵士等が早く楊雲
 をすかし見て後ろに廻はりし敵あるを用心せよと言ふ間
 もなく前後左右より引き包み我れ討ち取らんと舞めきた
 り楊雲は逃れぬ處と覺悟を極め右に當り左を支る瞬く隙
 に六七人斫り倒ほせしが長途を走りしのみならず再度の
 苦戦に疲れ果て薄手を數ヶ所に負ひたればいかで衆敵に
 當り得ん遂に刀を打ち落されしを拾ひ取らんとなしける
 時後ろの方より組付く敵あり振り解かんと身を掙き踏み
 出す足は滑かなる岩根の苔に留め度を失ひ千尋の溪に轉
 び落ち生死も別かずなりにけり

第十四回

一 双芒屨乾坤容
万 古丹心日月懸

龍跡山は易州城の西南三十里にあり傳へ云ふ山中に大石ありて其石上に仙人の足跡を留め龍跡も亦存せりと因て龍跡山の名あり又西の麓に當り大サ車輪の如き大坑あり中に四箇の洞穴あり東西南北に分れ春は東の穴より東風を出し夏は南の穴より南風を出し秋は西の穴より西風を出し冬は其北穴より北風を出す往昔法猛といへる僧其東穴に入りしに中に石堂石人あるを見たりしが其他の穴にも猶怪しきとあらんと更らに諸穴を窮めんとしたるに忽ち人の聲勵しく聞え其餘の三穴皆東の如し宜しく復び入る可らずと言ひしに驚き三穴を窮めずして止みたりと斯る靈跡なれども今は山賊の棲處となりて人跡は殆ど絶

孤峯云説地理叙來
歴聞話亦自有趣

木堂云叙事暗通題
意

孤登云叙彼邦弊風
極切實余友曾遊彼
邦爲余說其風俗亦
有此事作者語設皆
據實際不可等閑讀
去

へたり唯此山のみならず朝政壞亂して政令下に行はれず
兇賊所在に蜂起して險阻要害の山林は多くは盜賊の巢窟
となり商賈は爲めに業を失ひ農民は爲めに産を破り行旅
は常に害を被り庶民皆其堵に安んずるを得ず此く強賊の
出没して白晝人を殺し財を奪ふの兇暴を逞ふするも官府
の威力能く之れを鎮壓するま堪へず會ま兵を發して賊を
征するの舉あれを良民の徭役甚だ重く良民に課するの賦
斂極めて苛酷なり加之此官軍と稱する者到る處財貨を掠
め子女を劫かし其兇暴は却つて賊よりも甚だしきものあ
りされば良民は賊を懼れずして官軍を恐れ甚だしきは郷
紳の最も富豪なる者は賊に賂ふて官軍の抄掠に備ふるま
至る凡そ天變地異に由りて生じたるの災害は仮令甚しく

孤登云與有收斂之
臣寧有盜臣是之謂
也

財産を害おも人皆之れを恢復するの勇氣を失はず此災害
に勵まされて一層勉強し遂に財産を再造するとありと雖
も政法の紊亂して良民を保安するも能はざるより生せる
患害は遂に人の氣力を沮喪せしめて復ひ勉勵の途に上ら
しむるを得ず家に良田なきに非ず之れを耕せば收穫なき
に非ぞ然るに終歲田畝の中に擾々として僅かに收め得た
る粒々の辛苦の重斂の爲めに消失し盜匪の爲めに抄掠せ
られ勤勞を償ふの報酬の凍餒に過ぎざれば誰れか復た勤
勞の途に向つて力を用ゆるものあらん恒産と共に恒心を
失ふ小人の常にして遂に耒耜を投じて綠林の群に入り
只樸實純良にして盜まざるの民の飢死して止むのみ於是
乎田を耕すもの餓死せされば則ち盜となり盜となりざ

れバ則ち餓死す残る所のもの耕やさざるの田地あるのみさ
れバ明の末世に當り茫々たる荒壤數十里に連り漠々たる
曠原幾百里に達する者其綱紀の紊れずして政令下民に行
き渡りたる盛世にハ皆是れ春に萬頃の麥浪を漲らし秋に
一面の黄雲を簇せし天造の寶庫なりしなり此の滄桑の變
ハ決して天變によるに非ず即ち是れ人爲のみ痛ましきと
ならずやされバ龍跡山にも凡ろ六七十人の賊徒ありて其
首領ハ山東の産にて頃日偶然のとより仲間に入りて衆賊
を制服し遂に頭領に頼まれたるものなるが昨夜山寨を下
りて人家を掠めんと部下を引率し麓まで到りし時官軍と
覺ほしき者山寨を望んで攻め登ると覺しく前に派したる
我斥候の者と已に戰端を開きたりと見ゆるれば何かの以

て猶豫すべき直ちに一戰に及び遂に寄手を打ち破りて數
多の分捕をなし山寨に立ち歸り今朝しも其分捕物を見聞
し昨夜の功を賞すると知られたり山寨の正廳も覺ぼし
く一段高き席に坐を占め四邊を睨め廻りす顔色風格威風
凜然として勇壯に伴ふ果斷の相貌を表し年紀ハ三十左
右色黒く眉豊に筋骨逞しき壯漢なり小賊等の持ち運びた
る甲鎧器械其他の分捕物を一々点驗してありしが不圖目
に附きたる一口の長劍を取りて試みに抜き放てば此邦の
物に非ぞ言ひぞと知れし日本刀正に是れ三尺の秋水寒光
滴り一道の白虹手中に送る千將莫邪も及ばざる寶刀なり
賊首ハ何か頻り思ひ入りし体なりしが小賊等に打ち向
ひ

此刀を所持せるは如何なる者なりや敵陣の中に居りし
や如何々々

と語早急しく問ひ糺すに未坐に控へし一人りの賊が進み
出で、

麓の戦果てたる後はや山寨に歸らんと先に前みし我々
が行途に當りて一人の少年夜目にて爽かに知るよし無
けれと麓の敵とは打扮異なり必定敵の間者にて躬方の
陣に紛れ込み我山寨を窺ふならんと一同斬りてかゝり
しが思ひの外に手剛き者にて躬方二三人を討れしが牛
猛ウマシ小賊の名が後より抱き附きしに誤りて踏み込べらし
溪底タニソコに落ちたるゆゑ今朝未明に仲間のもの六七人溪間
を傳ふて彼の處まで尋ね行きて候

と其語未だ終らざるに數人の小賊牛猛の死骸を昇き擔ひ
俊秀トシヒコき一個の少年を高手小手に縛めて廳前に進み來れり
少年は色青さめて僅かに歩行に堪ゆる計り衣服は血に染
み手足に數ヶ處の手疵を負ひ其面部に傷あるは前きに溪
間に落ちし時擦り剥きしものなるべし少年は頭を低れて
語なく眼を眠りてありけるが馬忠は一目見るより吃驚し
飛ぶが如くに駆け寄りて繩を斷ち切り見かはす顔
恩人馬忠なるか、コレハ、コレハ、
と計り兩人は暫し呆れて語なく

夢ではなき乎、幻マヨイならずや、不思議なり、奇遇なり、
と互に手を握り喜びあへり小賊等も共に顔を見合せて如
何なる仔細のあるとよと不審氣イナカシに睨り居たり馬忠は頻り

に膝を進め

恩人には何故に官軍に従屬して我此山寨の討手とはありたましいしや

と奇怪なる質問に楊雲は目を見開き何事をか言はんぞせしが四方を見廻し介意させし体なるにや馬忠は獨り打ち點頭アタマき小賊等に向ひ

此方は我が恩人にて師とも君とも敬ふべき客人なり餘程憊れしと見受けられたれば我居室に請じて緩々慰めまいらそ間汝等は引き去りて變應の用意をせよ

と命じつゝ楊雲を伴ふて己が居室へと退きたりさて馬忠は楊雲を慰藉り汚れし衣服を去りて新衣に更へ手紙を包み藥劑を與へ粥を勧め稍心神の定まりしかば

徐かに楊雲に對ひ

某が斯る姿になりしに附ひては頗る來歴のあるとなり其は後に申し述べん恩人は何故此處等をば彷徨ひしやと問ひかけられ楊雲は嗟嘆し

浮屠氏の所謂寸善尺魔豫期する所は常に組語し期せざる所に事變を生ず回想すれば夢の如し意外の珍事出來せり

と夫れより三月初めに易州に入り交を許儀祖祐に結び屢苟安を訪ひしとより鄆懸郷の奸計よて志士に黨人の名を附し之れを羅織せると又父が嚴嵩仇讐に迂ふて狄道縣に配せられしを機會として奸徒等直ちに手を下し捕縛に向ひしを祖祐の密告にて聞き知り逃走の路に二度の防戦を

孤筆云一語凄然寫得當時境遇

なせし等凡そ此迄ありつるを洩漏もなく物語れば馬忠は聞く事とに或は腕を扼し或は齒を切り或は嘆じ或は慨クレシキき

鄢賊汝畜生我汝の肉を食はん

と飛び出さんぞ勢なりしが不圖楊雲も報ぐべき緊要事件あるを思ひ出し

此方にも意外の變あり今にして之れを思へば腸の九廻するを覺ゆ

と感慨悲憤の聲を吞みつゝ語り出づる顛末を聽くに楊雲が魯英馬忠に別れて易州に向け旅立せる後凡そ五日斗りを経て陳文仲は人を孫遠の許に遣はして言ひけるよふ兼て陳家より申し入れし縁談のことに付ては再三御断りもあ

りしかと文仲に於ては故ありて令嬢を申し受くべき條理ありと主張し嚮きに保定府城なる臨潯亭の池畔にて楊雲の爲めに打ち斃されし兇漢等が幸に蘇生したるを充分に手當を贈り孫遠の家隸の爲めに打挫がれ一時絶息したるに陳文仲の扶助によりて蘇生したりと傳道さしめ今にも府伯に訴へ出てんとする模様を示して若し陳孫晋秦の好コトを結ムスひと總べて之れを内濟に取り斗ふべしとの趣意にて頻りに好親を逼りしかと孫遠は固く執りて受け引かざり臨潯亭にて人を打ち斃せしなどゝの全く身に覺ゑなきとなりと主張して應答ざりしに陳文仲は愈憤り遂に府伯に讒して孫遠が門地を待み些少の才學あるに誇りて常に府伯を蔑視し専ら其近郷に威を振ひ人も無げなる振舞ありと

演べしかば府伯も亦孫遠が己れの門下に奔走せざるのみ
 か赴任以來一度も謁を請ひしとなく苞苴さへ贈らざるを
 意に挟み居たりし時なれば陳文仲の讒ウソコトの磁石の鐵テツに於け
 るが如く忽ち其意脈を通じたり此機に乗じて陳文仲が煽
 動によりて彼の二人の兇漢孫遠のイブツ附ツケにより其家人の爲
 めに亂撃せられたる旨を府伯に訴へければ府伯直ちに其
 訴狀を採り擧げ孫遠を捕縛するに決せり元來保定府伯の
 索震字の公張と云へるものにて嚴嵩父子に阿附して登用
 せられたるものにて奸佞にして貪婪飽くとを知らざる小
 人なり陳文仲が絶えず金銀寶貨を贈り又其門下に奔走し
 て諛を獻するを以て深く之を愛し文仲のとにしあれば情
 を曲げ理を抑へて之を保庇し市民時として陳の暴横を訴

ふる者あるも恰かも聞かざる如く措て之を問はざれば文
 仲の常に府伯の威を藉りて市民を惱ましたりされば此回
 の訴訟も陳の傍より唆カ囑トクしと亦府伯の深く孫を嫉めると
 の事情投合せしとなれば遂に孫家の大阨をトク獲せり頃ハ
 嘉靖三十年三月二十日孫遠の魯英が京師に旅立する別筵
 を其家に開き馬忠と共に出立するとなれば二人を上客と
 なし其他數人の賓客を會して酒を酌み殺を侑め宴將に酣
 ならんとする時數十人の捕卒亂入して矢庭に孫遠を縛め
 家族をも残らず搦め捕らんと弄めきける馬忠は大に憤激
 し理非をも質タテさぞ罪狀をも告げず理不盡に士人を捕縛す
 るは言語同斷なりと罵り狂ひ人々の支ゆるをも聞かず捕
 卒に打つてかゝれば兼て用意やしたりけん百人餘りの士

卒門外より闖入して二手に分れ一手は孫遠并に家族を捕縛して之を昇き出し早くも府城に向つて馳せ去り一手は猶馬忠等を始め抵抗ものを縛め取らんとなまたるに馬忠は猛威を震ひ鐵拳にて二三人を打ち斃し更らに劍を抜て十餘人を殺傷し魯英も亦二三人斬り伏せければ豫て馬忠の勇力と劍法とを聞き怖ぢせる士卒等なれば我後れじと逃げ去りて暫し敵の跡の絶ゑたるを幸ひ來り合せし賓客と孫家の奴婢等は何れも遁け去り今は孫家の城墟には馬忠と魯英の雙影を留めたるのみ馬忠は烈火の如く憤り直ちに府城に撃ち入り孫遠親子を取り返さんと哮り狂ふを魯英急に押し留めて城兵は疾く孫公夫婦を城中なる獄舎に投じて城門を鎖ざし城中には猶五六百の兵卒あれば堅

孤峯云叙事中文説
風景作者筆最慧
詩

く守るは必然なり足下何程の勇あるとも單身にて功を遂げんと思ふよらず且つ漫りに城門に逼らば却つて孫公の罪を成さん孫公の冤を明して無事に放免を求むるの支障となるべし一旦此を立ち退いて暫く姦徒の氣焰を避け別に計を設けて孫公を救ふに若かずと馬忠を諫め孫家を後に見倣して間道を走り十町餘り來にける時天色稍く暮れ果て、雨を醸せし春の夜の雲漏る星の影もなく心も空も曇りがち急遽匆卒の場合には智慮分別も盡き果て、一寸先きは闇夜の黒き野徑を一散に足に任せて駈け行きしが魯英は稍く足を留め後の方を見願れば數多の松明を振り照して追ひ來る敵のありと見ゆるに馬忠は何地へ行きたりけん影さへ見ゑずなりしかば雄々しく見ゑても流石は

巾輓心の細路たゞと森の叢中に癡れ果てたる古廟の
あるをすかし見て突と馳せ入りて内なる扉を開くや否や
投げ出そ如く身を打ち伏し急しき息を吐き居たり松明の
早くも此方に近付き古廟を距ると十間許りなる路側に留
まりたり此時前面より一人の貴客六七人の従者を携へ此
方を望んで馳せ來りしが松明の光りに照らし見て近く進
み兼て吩咐置きしもの如何せしやといと横風なる語の
下に士卒等の拜伏し即ち此處にと答ふる間もなく三四人
突と起つて一箇の轎子を貴客の面前に昇き据へて内より
扶け出せし即ち是れ別人ならむ孫遠の愛嬢なる紅霞に
てありければ古廟の中より窺ひ見し魯英のヒタと呆れし
のみ猶ほ其所爲を覗き視るを彼方の其れと知るよし無れ

ば陳文仲の濁み聲にしたるき調子を帯びて何事をか紅
霞に私語き告げゝるに紅霞の痛く憤ふり陳文仲を罵り辱
しめ其意に隨ふ氣色なければ陳文仲も怒を含み従者に命
じて威しつ賺しつ再び轎子に押し入れんとなしたるに紅
霞の手早く従者の帯びし劔を抜き持ち咽にグサと貫き立
つればアツト揚げたる聲と共に進む血汐の上に身を投げ
伏して息絶ふたり陳文仲の今更らに手に持つ珠を碎きし
如く呆然として佇立しが怒を従者に遷して啼々と叱り散
らし數年以來心を焦し辛ふして手に取れば忽ち狂風に吹
き去らる骨折効の無きとよと愚痴を残して従者を引き連
れ元と來し道に歸り行きけり憐むべし深園に生長して雨
を厭ひ風を痛み今を盛りと咲き出でし花の姿も夜嵐に散

かりて果敢なく消へ残る香を野路に留めたり魯英の今目前
 玉を碎ける無残の所爲を見つゝ救ふの術もなく我を婦女
 と知らずして慕ひし烈女の節操を心に感じて胸逼りいと
 露けき旅衣の袖に湛へし涙の時雨身も浮く斗りに泣き
 沈む婦女子の情と知られたり暫くありて氣を勵まし古
 廟より立ち出て紅霞の遺骸を廟中に引き入れ箕の子の下
 に取り收めしも土もて蓋はん氣力もなく吐息つゞく止
 みたる折柄何人なりけん多勢を相手に戦ひながら此方へ
 漸く近寄るものあり必定馬忠が孫遠を奪はんとして事成
 らざ敵に逐はれて来るものならん出で援けんとは思へ
 ども疲れ果てはなかくに身を起さざぬ自由ならず僅
 かに足を履て、動靜如何と窺ふのみ折柄暴雨降りしきり

車軸を流さ勢ひなるに松明は打ち消され黑白も分かぬ暗
 黒とはなれり此に便宜を得たるにや馬忠は身を避けて古
 廟の中に来り外より扉を開きつゝ内に人ある氣相を認め
 何奴なりやと呼ぶ聲に馬君にあらずや魯英なるやと答へ
 しに安堵して向きに魯英に分れて唯一騎取りて返し孫遠
 を奪はんとなし幾んど死地に陥りし次第を語り又魯英よ
 りも陳文仲が私かに紅霞を奪ふて此處に来りしより紅霞
 が刃に伏して節に死したるまでの顛末を詳しく語るに馬
 忠は唯怒氣に逼りて物さへ得言はず眼の光りに憤焰を顯
 すのみ此時雨は益烈しく風さへ猛く吹き起りしかば城兵
 も引き去りしならん雨の歇むまで疲勞を休め小休を俟ち
 て立ち去らんと馬忠は暫し假睡みしと思ふ間もなく耳邊

近く人聲の喧しきに驚かされ眼を放開けば此は如何に其
 身は城兵の爲めに嚴しく縛られてあり魯英は如何しつら
 んど四邊を見れば影もなし縛められしは自己のみはや逃
 げ去りしか但し又敵の爲めに討れしや不審晴れねと敵兵
 に其れと問ふべきとならねば城兵に引き立てられて外に
 出るに雨は何時の間にか晴れ果て、曉近き星光は曠野を
 照らして百歩の外に人を見る可し城兵は馬忠を城内に携
 へず凡ろ十餘里を歩みけるが名も知れざる山中に引き込
 み深森の中に於て縛りあげたるまゝ打ち果たさんとなし
 たりけり是れ一は馬忠の武勇を怯れ一は獄中に繋ぎて拷
 問に日を累ぬる時は黨類ありて城中を襲はんとを慮り斯
 く手短かに處分せんと府伯の殊に命せしなるべし左れば

龍溪曰く又是れ水
 滄志

城兵等は馬忠を引き据へ一人は首を抑へ一人は足を壓へ
 今一人は刀を抜き持ちて立ちかゝれば斯る豪傑も此に至
 りては詮術なく唯手を束ねて死地に就く黄泉正に刀下に
 在り一呼吸の間生死の境將に身首の分れんとする時數多
 の山賊林中より現はれ出で城兵を打ち散らし馬忠の索子
 を解き敬しく拜伏せり此山賊の頭領は即ち馬忠が武藝の
 弟子なる陸参と呼べる者にてありしかば馬忠は再生の徳
 を謝して此一群に伴はれ龍跡山に入りて暫し身を緑林の
 中に潜むるととなりし顛末を語り了りてさて言やう其後
 間者を文仲の許に遣はし又城内に派して様子を探らせし
 に紅霞は死したるに相違なく魯英は如何なりしや知るよ
 しなく孫遠夫婦は獄中にて死したりと云ふもあり或は猶

ほ存在せりと云ふもあり風説分明ならざれば猶ほ篤と實
状を探りし上にて陳文仲を始め家族殘らず屠り盡し事宜
によらば直ちに府城を襲ひて孫遠を救ひ府伯を殺さんと
已に陸參と示し合せ昨夜の始末も實は其用意をなさんが
爲め劫掠に出でたるなりと其身が圖らざるも山賊の群に入
りたるを言ひ譯する如き語氣にて顔赦らめて言ひ出せる
は身を濁世に置くを屑イギキとせず清淨の地を求めんが爲め
苦辛せるもの却て汚穢の群中に落ちたるを想ひ起して心
に恥る所ありと知られけり楊雲は嘆息して

世にも不幸なるは魯英が身の上なり夙キコトく枯特を喪ひ踏
みも慣ナラはぬ世途を孤行して身に降りかゝる災厄に重ね
くの艱難苦辛今頃は如何になりけん生きて此世にあ

孤峯云一語有情照
映後回

らんには復た再會の期もあるべし
と言ひかけて熟く馬忠の顔を眺め
足下の面体に夥しき瘡痕キズあるは如何
と問ひかけられて馬忠は初めて心附きしが如く
前きの日城兵と戦ひし時荆棘の中をも嫌はず駈け廻は
りしが爲め斯る疵をも受けたるならん
否々荆棘などにて搔き裂きし疵とは見ぬぞ正しく狐痕
と認めたり察する處魯英と古廟の中に休みし折柄魯英
は早くも城兵の來りしに心附き足下を揺り起さんと試
みしも足下深く睡境に入りて覺めざるゆゑ急遽の場合
面部も厭はず手當り次第に搔き亂して足下を救はんぞ
かしたるに敵兵早く薄ウソかしかば止むを得ず其身を以て

讀後曰瓜豎面、
好笑話、此人に在
て最も妙

單り逃れしに相違なし面部の疵は即ち足下を救はん爲め魯英の殘せし爪痕ならん

と推察せる注意の精密説き得て理あるに馬忠は手を拍て感賞し頻りに膝を進ませて

某固より縁林の群に在るを喜ばず陸參の勸めによりて止むを得ず一時の危急を逃れん爲め暫し斯る姿となるも心は清淨潔白なり且つ府城に押し寄せて孫氏夫婦を救はんには兵力を藉らざる可らず仍て山寨の黨類を語らい武具兵糧の用意全く整ひなば直ちに府城に馳せ向ひ城兵を駈け散らして孫氏を獄中より救ひ出さん所存なり人已に暴虐を逞ふす我豈獨り正路を履むべけんや貴殿の所存はイザ知らず某は疾くより決心せり明日に

も打つて出でん覺悟なり

と思ひ入りて見れば楊雲は容を正し

事柄と場合とによりては一二朋友の爲めに一身を顧るとなく生死の際に事を了するまでに踏み込んで身を處そるとなきにあらず今孫氏と云ひ魯氏と云ひ其人々の身の上を知るものより見る時は如何にも痛ましき限りにて氣の毒に思ふの情は胸を劈く計りなりされども吾曹は此情の爲めに全く身心を制せられて無謀の舉動に出るをば深く戒慎せざるべからず抑も孫魯二氏の災厄に陥りしは偶然の事にあらず其禍源は必ず何れの處にか存するなるべし若し幸ひに孫氏を救ひ得るも其禍源にして依然たる限りの孫氏の如き災厄に罹るもの

絶えず世に現はるゝとならん古人の言ひし如く四海皆兄弟にあらずとも責めて悉く朋友なりと認めんに方今四海億萬の朋友の皆孫魯ならざるの無し天若し大任を吾曹に降して此億萬の朋友を濟ししめんとの意ならば吾曹の決して一人の友人に一身を殉すべきにあらず此億萬の生靈を濟して天意に奉答すべき筈ならずや畢竟足下が魯英と共に走りし時自分獨り引返して孫氏を奪はんとなしたるの無謀の所爲なるのみならず其れが爲め魯英に累ひを及ぼして一層禍を大にしたるの疑ひもなきとなり足下若し孫氏を救ふを後日の計と定め一先づ魯英と共に走りて難を避けたらんに再度の厄難の免れしならん而して魯英も亦生死不定の人となること

にあるまじき唯足下が暴虎馮河の所爲によりて可惜アタラ名士を失ふのみならず爲めに府伯の怒を重ね孫氏には一層の痛苦を被らしむるに至りしならん足下は又他人我を待つに暴虐を以てするゆゑ我豈獨り正路を踏むべけんやと言はれたり其の甘じて他の暴虐を受けよと云ふにあらねど足下の意若し他人暴虐を爲すゆゑ我も亦暴虐を施すべし他人正路を履まざるゆゑ我も亦正路を踐むべからずと云ふにあらば到底吾曹の同志との傲し難し官府暴威を振ふて民を賊ふ時民能く道を守り理を執りて正義を鳴らし議論を唱へ以て弊政を改革する等のをばなさず人賊をなすゆゑ我亦賊をなすべしと揚言し以て上下相害ふは是れ我邦の弊風にて實に厭ふ

べき限りなり吾曹の此陋習を襲ふべからず人、不善を以て我に臨まば我の善を以て之れに對すべし人、暴虐をなして民を賊のよ我の正道を守りて民を濟ふべし足下の意の人、民を賊ふゆる我も亦民を賊のんと云ふに在り是れ大なる謬見なり某の又空論を唱へ世に行ひ難き道義を守りて進退せよと云ふに非ず某素より計慮する所あり目下の急難を排し去るの後徐々と手を着けて暴政を挫き虐威を破りて濟民の事業を果さんと心に銘して曾て怠れず左れば今日無謀の舉動をなして一朝の怒一時の情に激まされて身を怠るべきにあらす斯く言へばとて孫氏の災厄を傍觀して救ふに及ばすと勸むるに非ず某は深く孫氏の災厄を痛めり之を痛むの情は足下より

も薄からず何卒して之れを救はんとするの志も亦足下と同一なり唯足下と異なる所は成就すべき良計を求めて之れを救はんとするにあり吾曹の及ぶ限りは力を出して之れを救ふべし唯一身を賭て成否を命に歸して争ふ如きは某の爲すを厝しとせざる所なり物に輕重あり事に緩急あり宋襄の仁尾生の信は世の笑柄となるに過きず争で世事に益あらん魯英若し足下を捨て、能く身を全ふしたりしならば彼れは能く輕重緩急の務を知るものと云ふべし彼の生命は友の爲めに捨つべからず彼の進退は友誼にのみ委ぬべからず友誼よりも重くして且つ急にすべき務を彼れの肩頭に高く擔へり故に足下と共に死地に就かずして去りしなるべし是れ強ち入

り組みし理にあらねば足下も定めて了解サトしならん
と理非を判つて説き諭すを馬忠は充分に解し得ず

我正直なるとは我能く信せり我は決して悪を爲さず我
は善人に與し悪人を殺すべし

と憤然として起んとするに最前より壁に身を寄せて窺ひ
居たりし陸參は遽ヒキトて走り出で、馬忠を扯ヒキトめ

僕不敬をも顧みず兩公の物語を物蔭モノカゲにて竊かに聽き取

り候マカレひしに楊公の御高論は如何にも正しき道理にて間

然すべき所なし僕現に綠林の群に在りど雖も聊か書を

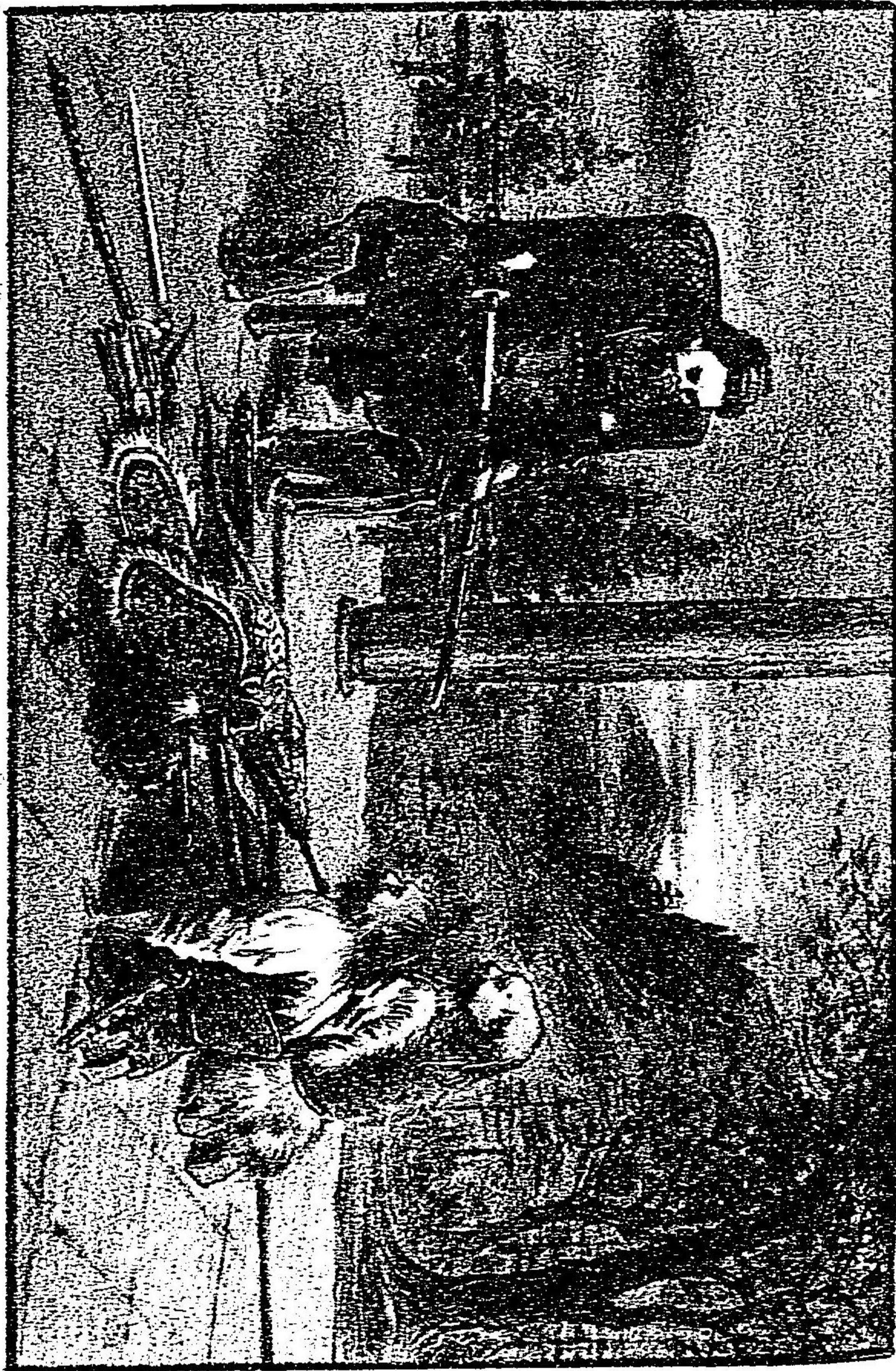
讀み理を解せり一時止むを得ざる事情ありて斯る忌は

しき身とはなりしも固より良心をば失はず楊公の高論

によりて愈々心志を一新せり孫氏の事は擧げて僕に任

したまへ此人若し生きて此世にあらんには僕必ぞ籌策
を廻らし奪ひ取りて來るべし

と決心して見為ければ楊雲は熟ら陸參の相貌を視又其言
語に勇氣の溢れたるを察し且つ其擧止ユズに餘裕ありて智慮
は自ら馬忠の上に出るを見分けたれば馬忠に説き勸め孫
遠を救ふとは擧げて之れを陸參に托するとはなせり



第十五回

白屋可能無孺子
黃堂不是欠陳蕃

楊雲は龍跡山の山寨にて手疵を治療し身体を養ひしが僅か二三日にして稍平生に復したり斯くて第四日目の早辰馬忠は猶寢床にある頃楊雲は起き出て陸參を召ひ出し某は此快晴に乘し杖を山中に曳て遊歩を試み壽情を慰めんと思へり勿論正午頃には歸るべし馬君起き出てなば此旨を通し呉れよ

と言ひ捨て、山寨を出て行きしが午を過ぎても歸り來らず其日も稍く暮れ果て、點燈頃になるまで歸る形影のあらざるに陸參は深く怪み其由を馬忠に告げ楊雲の寢室に至りて驗アラスむるに案アラスの下に馬忠に宛てたる一通の書面あり馬忠は急ぎ陸參と共に披き覽れば

馬知節大兄足下僕圖ラズ足下ニ邂逅シテ春待之厚ヲ辱
スル丁既ニ過重ナリ宜シク此ニ留リテ共ニ前途ヲ計ル
ベキナリ如何セン父親方ニ配請セラレテ窮僻ニ在リ人
ノ子タル者豈一日モ心ヲ安スベケンヤ今將ニ往テ省セ
ントス再聚ノ期遠キニアラサルベシ今告ケズシテ而辭
ス弟ノ意ニ非ルナリ然レモ若シ告ケバ則チ兄ノ強テ留
ムルヲ知ル故ニ書ヲ留メテ以テ情ヲ叙ブ
別に細字にて書後に左の文字を記せり

此處久戀ノ地ニ非ス郡按撫方ニ州治ニアリ必ス大兵ヲ
發シテ來リ攻ム可シ且ツ士ノ出處進退ハ苟クモス可ラ
ス心思清シト雖モ爲ス所正シカラザレバ遂ニ大業ヲ成
ス丁能ハズ兄宜シク陸參ト謀リ寨ヲ燒キ財ヲ散シ部下

孤豈云變幻百出續
者眼益忙

ノ匪徒ヲシテ良民タラシムベシ敢テ復心ヲ布ク

馬忠は関終りて陸參と顔見合せ暫し黙してありけるが陸
參は歎息して

之れある哉之れあれ哉楊君は必ぞ此所爲に出つべしと
僕疾くより推測せり今更奇むに足らぬとなり州兵の攻
寄せ來るとも六七日をば過ぐべからず此上の楊君の教
に隨ひ山寨を燒き拂ひ貯へある財貨を悉く手下の者に
配布なし思ひくゝに解散すべし僕の兼て約せしとあれ
ば別に一身を處分すべし

と言ひ出るに馬忠の怒れる聲を揚げ

敵の來らんとを聞き怖ぢして落ち失せんとの卑怯至極
なり汝等の心のまゝに進退せよ敵何萬騎來るとも我一

又云鼻是馬知節之
旨

人にて踏潰さん我の固より財を欲せざ又山寨をも屑し
とせず財も散すべし山寨も焼くべし唯我一身の動くべ
からず寄手の兵を打ち破りて姦賊を擒にするまでの斷
して此處を去るの意なし
と變逆立て、辨りたつるに陸參も止むを得ず暫く其意に
任せたりしが心中の不服にて此人の逆も頭に載て事を爲
すべき人ならずと私かに心に信するうちにも楊雲が思慮
ありて智謀策畧に富めるのみか能く物を容れ人を愛し天
晴人の上に立つべき度量あるに感服して頻りに慕ひしく
何卒して楊雲と再會し其人の意志の下に周旋せんものを
と思ひ定めしも師弟の誼今更遽かに絶つべきにあらねば
心ならずも山寨に留まりけり

孤峯云毎を設地理
運筆自在博識敬服

又云何等文情

却説楊雲は龍跡の山寨を立ち出て、龍路を西北に取り父
の誦所へと志し四千里に餘れる長途の旅に就きにけり抑
も易州の三面皆山を以て圍繞し、峨々たる山脈相連り峻嶺
重障迂曲蟠屈して紫荊倒馬の兩關も此亂山奔騰の間よあ
り要害に宜しきもの行路に宜しからざるに即ち當然のと
にして楊雲が前途を急ぐ旅路の障碍如何ばかりと想ひ遣
るべし左れども楊雲が今の身にて世にある艱難を願れば
斯ばかりの險阻をもて比較すべきにあらざ唯其身父母を
省して重なる不幸を慰めんとする至情と目前の危急を避
けて前途の大計を定めんとする壯志に勵まされて行路
難に想ひ到るの暇もなく總ての無難を慮りて早くも其身
を買豎の妾に養し輕捷旅客となりしに一層の便宜を得眼

龍溪曰く一個好表の人物を現出せんと欲すれば必ず先づ力を盡して潜龍窟、獅子洞、の光景を描出す是の好山水蓋し卷中の隆中

前に現はるゝ景物の遷り變はるに心目を慰めて積もる憂苦を慰れつゝ山迎へ水送り一村又一驛星を見て起ち星を見て宿り發程より第三日目の夕暮にははや二百里餘を走りしが如何して迷ひけん行けども路を得ず遂に亂山合沓せる際に其身を見出したる空翠衣に滴り爽氣肌を透る鳥道の外は絶へて往還路を見ず遙かに谷底を見渡せば叢林亂樹の中に隠々として里落のあるを窺ひ得たり斯くて標目を得れば歩を急めて山を下り四方を顧るに僅かに數十戸の茅屋溪水の東西に沿ふて散點するのみ此小里落を距ると六七町にして更らに世外の趣を占めたる一章廬あり門前には細柳の煙を裊て絲を垂るあり牆内には修竹の風に搖て玉を憂るあり幾株の桃杏其間に交錯し山

間の氣候は猶ほ能く枝頭の花を抑留して幾分の春色を殘せり楊雲は宿を乞はんと前み寄りて戸を敲けば内より一個の蒼頭出來りて來意を問ふ楊雲は路に迷ふて難澁する旨を告げ懇懇に寓宿を求めけるに主人と覺しく半白の老翁出て來りて楊雲に向ひ旅客は何れより何れへ行かんとするやと尋ぬるに楊雲は偽りて父なる者山西の間に貨を轉して商賣せるに此頃病を得て某州に在りとの報ありしにより急ぎ彼の地へ赴かんと保定府より來れりと答へけるに老翁は熟く楊雲の面貌を視て獨り點頭き山間の孤屋なれば客に供ふる物さる無く誠にいふせき住居なれども御難澁の模様を見かけて謝絶るも心なき事なれば御留め申さん意靜かに休みたまへ

と懇ろに挨拶し楊雲を延て中堂に請じける楊雲は熟々坐中を見廻はし又主翁の舉動を観るに其態度と云ひ相貌の賤しからざるは尋常庄客の類にあらす由緒ある人の世を避けて獨り武陵の春を占領るものなるか蘊藉しさよと心に賛めて燈火の舉かりしに心附き只見れば前面の案上に數卷の書物を重ねありいよ／＼主翁の常人ならざるを推しつゝ問ひ試みんとなしたるが其身の質豈に装ひしに心附き慎んで語も出さず何處までも商賈の扮装に適する實を示さんと殷懃おさし扣へたり主翁は蒼頭に扮附黍を炊き雞を煮て新來の客に供しいとも手厚き待遇に楊雲も打ち解けて

先刻より覗まいらするに翁は尋常の人とも覺えず世を

思軒曰半開之花假
醉之酒妙皆在引而
不發世事當作如是
觀主翁一答便我想
望人品

見限りて斯る深山に退き赤松子に随ひたまひしにはあらすや苦しうらすば貴姓尊名を告げたまへ

と問ひかけしに老翁は打ち笑ひ

花は開くと開かざるの間に妙趣を存せり足下が某を視て尋常の莊客にあらそと疑へば某も亦足下を視て尋常の商賈にあらすと疑ふ其等は互に打ち明けざる間に味あり某も足下の素姓を聴くまじ足下も亦某の姓名を問ひたまふな

と言ひ消して更らに話頭を他に轉けたり流石の楊雲も此一言には胸に波打つまでに驚駭せしが更めて翁の容貌を熟視するに白毛を雜へたる秀眉は長く目瞢を蔽ひ鬚鬣は美しく膝の邊に垂れ威風堂々として豪傑の風采を備へ強

孤峯云寫英雄真態
不多費力

壯の昔日世に輝くべき功業を建てずして止みにし人とは
思はれず假令青雲の宿志を遂げせども蹉跎白髪を歎じて
鏡裏に形影を吊するの衰殘を表はさず猶ほ胸中に雄圖を
抱いて期する所あるもの如し其談論は極めて快活にし
て綽然たる餘裕を舉止の中に示し世を憤ふるもの常と
して嗟嘆の聲と悲傷の音は毎に談話の間に發し然らずん
ば罵詈訕諍を以て不平を慰むる等は免れ難き所なるも翁
は時に慨世の談に渉るも左までに切迫せる氣色なく容儀
に一層峻嚴を加へ語氣に些少の變調を示して不平の心事
を道ひ露はすのみ楊雲は翁が己れの假裝したるを察しな
がら故らに詰問もせず胸襟を披いて泰然時事を談論する
を見て其心事を量りかねて心に思ふやう此老翁の徒らに

又云士龍是齡少智
老者

世を捨て斯く山林に隱居するにはあらず夙に濟世の志を
懷て之を施すの時を得ず空く雄圖を青山に埋むるものか
然らずんば一たは要路に當りて時流に迂ひ遂に冠を掛け
て退隱したるものならん何れにせよ當世に不平なるに
相違なし若し然らんに余が心事を打ち明けて語らんに
の無論贊助を受くるならん老成者の久しき間に積み來り
し經歷より生ずる智慮分別の唯り才學に資りて事を爲す
に優れると多きの言ふまでもなし兎に角此翁の來歴素姓
を知りたきものなりされば如何にして其出處を究むべき
やと坐るに思ひ惱みけるが漸くに意を決し今我身の父を
配所に省するの途にあり一日二日遲延るゝとも孝道に缺
けたりとすべからず暫く此處に留りて蹉跎を窺ひ何等か

の方便を用ひて先づ翁の來歴を究め然後詮術ありと腹に問ひ腹に答ふ此夜の疲れたりと程よく主翁に辭して設けの床に就きけるが如何にもして老人の素姓を確めんとするの一念に刺衝せられ神も清み渡りて眠を思ひぞ仰臥して天に朝せる雙眼に種々の感情を鍾め來りしと見ふ或は睜かり或は塞き或は膾々として昏く或は爛々として輝き萬感の胸中に往來する態を其枕頭に滅る残りし一穗の燈火にて照らし出せり蓋し父母の事朋友の事其身の事を取りませて深く思ひ沈みしなるべし更の深くるに隨ひ萬籟一家に歸し時に怪禽の屋後に叫ぶを聴くのみならず折りから壁を隔てゝ男女の語らふ聲幽かに耳に觸れしを奇みながら神を潜めて窺ひ聞くに男の聲の先刻まで對話し

孤筆三級事精叙古
今人未寫出處

て耳に馴れたる主翁の音にて女に至つて妙齡の婦人と思はるゝ聲音なり定めて此家の嬢子ならん今頃まで寝もやらむ何事を話そならんと訝りながら不圖耳を傾くれば那按撫と呼ぶを聞き益疑ひ窺かに床を起き出て隙隙より窺ふに室隅に立て劍を按じ此方に向つて眼を注きたるは即ち彼の主翁にて其が膝下に身をなげ伏して諫むる如き状あるは容顏麗はしき一人の少女にて其語は確と聞き取りかたけれども主翁の殺意を止めんとて争ふものあるべし楊雲は心に思ふやう此家の主翁は綠林の首領なるべし前に余に向つて装ひし風彩は我を油斷させんため計畧なりと覺ふなり世には逞ましき盜賊もあるもの哉我をして一個の英傑と想はふめ我父親を思ふの情を轉して其唾

又云使人遲疑彷徨
是英雄本領

暖に接するの榮を得んども、まてに暮はしめて此に留め遂に
 其手中に歸せしめたる手段の程こそ怖ろしけれされば又
 老實を装ひし前の蒼頭も其手下の盜賊なるべし唯彼の小
 娘が老翁を諫むるは婦人の持前にて優さしき情趣のあれ
 ばならんさるにても往きに鄢接撫云々と確かに耳に入り
 たるは若しや鄢賊等の意を承けて我を殺さんとするもの
 にてはあらざるかと思ひ或ひ雲時茫然としてありけるが
 假令老賊は尋常の山賊にもあれまたは權家の助手にもあ
 れ我に向つて殺意あるとは已に是れ分明なりさらば我が
 今の身に取りては彼れと闘つて雌雄を決し生を萬死の間
 に保つか但し暫く此を逃げ出てかなはぬまでも身の安全
 を計るべきか二ツに一ツ思案を定むるの外はなし反つて

此身を願れば國の爲め民の爲め大業を思ひ立ち未だ寸功
 だも見ざるに先たち進んで死地に入るべきにあらず此等
 の場合に在ては退ひて身を保つために全力を用んのみ賊
 等の目に留まらぬうち遁れるだけは遁れて見んと早くも
 決意し私かに臥床を脱け出つて壁を壊ち牆を踰へ裏手の
 方の小路より北を望んで馳せ去りしが凡ろ七八町も過ぎ
 去りしと覺ゑし時後の方を願れば松明の光東西にかけ違
 ひ南北に馳せ廻はるに予さては我を捕ゑんと寄來る追手
 なるべし彼の村落の農民なるか但し彼等の告訴によりて
 官より向けたる捕手なるか何れにせよ我を追ふものに相
 違なし踏み止りて支ゆべきか足に委せて遁け去るべきか
 不知案内の山村にて殊に夜陰のとなれば方角さゑも定ま

らぞ思ひ迷ふてはなかく、お足の運ひもはかどらず免角
するうち一二町進みしに初めに見えし數本の松明は漸く
遠く隔りて遙かに溪間に沈みけり然るに一點の火光のみ
此方に向つて飛ぶが如くに追ひ逼りはや一二町を隔つる
計り楊雲今は心を決し數多の火光四方に散亂して唯一點
の此方に向ふは手を分つて搜索すると覺えたり然らば人
數は唯一名か二三名に過ぎざるならん彼れ何程の勇あり
とも我寶刀に當るべきイデ思ひ知らさんと身を構ふ敵の
近づくを待ちうけたり

第十六回

花摧猛雨空春苑
月掩行雲慘夜天

楊雲は足場を量りて踏み留まり近づくまゝに追ひ來る者
を火光の下にすかし見れば是れ即ち別人ならず前きに我
を害せんと辨めきたりし老翁なり我留まりしを見て急き
もやらす徐々と歩み寄り間近く來れるを熟視するに彼の
快活なる顔色は宵に膝を交ゑて談笑せし時に異ならず笑
容を眉目の間に呈はして進み寄る狀は害を加ふるにあら
ずして歡を求むるものゝ如し楊雲は其心意を測りかね油
斷ならじと心を配り寶刀を後の方に隠し持ち寄らば斬ら
んと身構へたり老翁は聲を揚げ

少年暫く俟たれよ、暫く某決して害心なし宵
に宿りし其時より汝に問ひたきとありしも内外の耳目

に遮られ知らず顔に濟ませしうち不慮の事變の起りし
かば已むを得ず汝を此處まで走らして

と言ひつゝ間近く進み來るに楊雲益心に疑ひ甘言もて我
を欺き不意に捕ゑん計畧なるべしと思ひ取りては猶豫せ
ず匿し持ちたる寶刀を抜く手も見せず老翁の眞向目かけ
て切りつくるに老翁は身をひらき忽焉として後に廻れは
斯は仕損せしと氣を^焦ち^疊みかけて切りつくれは右よか
ひし左に避け相手の疲るゝを窺ひさまし携へ持ちし鑊杖
にて眼前に閃めく電光を叩き墮として足下に踏まへ

イカニ少年汝の力量は我に及はず汝の伎能も我に劣れ
り汝の生命は方さに我掌裏にありさりながら我は決し
て殺意なし我に殺意なきのみならず汝の急を救はんと

孤峯云此翁是相上
老人

龍溪曰く山中老翁
の一段、感むらく
は日本小説の常套
に落るしを

そるものなり又唯救ふに止らず汝を助けて志業を達せ
しめんと思ふものなり

と意外の語に楊雲は茫然として木立し再ひ抗する擬勢も
なくさりどて未だ老人の語を信して其膝下に平伏するの
色も見ゑず正に疑惑の路に迷ひ爲さん様を知らざるを老
翁は見取つ

少年、餘りに唐突に言ひかけしゆゑ定めて驚きもし又迷
ひもしつらん余の汝の心緒の沈着^{シヤウ}まで差しひかへて汝
の思慮を充分に發達せしめんと存すれども燃眉の急あ
る此場合猶豫すべき時にあらねば先づ緊要の事のみ播
ひつまんで汝に告げん余が姓は司馬名は驥字は千里言
はば江湖の半隠士世を見限りしにもあらず又世に求む

孤峯云急遽之際一
語不有發是眞豪傑

作者寫其態度又不
苟

三百十
る所あるにもあらず深き所存のなきにあらぬと其の逐
次に知るを得べし斯く我が本名を名乗りし上直ちに汝
に問ひたきの少年其方の身の上なり足下の若し楊家の
子息にていあらすやいい必ず楊氏の子なるべし
足下の面貌の克くも父御に肖たるにて深く思ひ當れる
とあり足下若し楊氏の子ならば足下の椒山の實子にあ
らざるとも某能く承知せり
と意表に出てたる翁の語に楊雲の忽ち迷誤の雲を披き今
の何をか猶豫さべき直ちも地上に拜伏し
怒るさせたまへ晩生不才にして龍鳳を辨せず數敬禮を
失へり仰せの如く楊繼盛の一子にして楊雲字の士龍と
呼ぶものなり翁の如何にして夙くも晩生を其者なりと

知り玉へる

老翁の微笑て楊雲を扶け起し熟くと面をながめ
親子との言ひながら克くも父御に肖たるものかな某の
卿の父との莫逆の友にして終始志を打ち明かし國の爲
め民の爲め經營計畫すると一ならず種々に心を碎きし
後某の思ふ旨ありて仕途に就きしも志行のれされば間
もなく職を退きて直ちも父御を定海縣に訪ひたりしに
父御の楊家の女を娶り正に卿を擧げしと云ふ其日にて
歡喜の眉宇に接せしが四五日逗留なしたるうち國事に
就て協議を遂げ父御の一先つ本國を歸る決心にて某の
袂を分ち爾後兩三度互に書信を往復せる後遂に父御の
訃言に接せり某の其時京師に住せり其後卿の楊家の種

子となりしよしハに聞き及ひしかば父御に似てあらん
 には龍種鳳雛世に頼母しき少年ならんと深くも心に慕
 ひしに頃日朝廷には後漢の末季にも等しき黨人鎮壓の
 陰計を定め嚴嵩父子其爪牙を四方に派し草莽有爲の壯
 士を捕へ抗するものは誅戮すべき方案をよりく施す
 趣なると故ありて某早く知り得たり今年春初楊繼盛賤
 諱の後椒山の名聲は江湖に轟き人皆其清節を重んずる
 の餘り延ひて卿の身に及ぼし其子は四方を周遊し天下
 の名士と結び頻りに國事に奔走せりと傳聞せるうち今
 朝しも卿等同志の士が易州にて官軍と戦ひしと又孫遠
 の捕獲されしことまで悉く聞き得たり斯る邊鄙に浮世
 の事の洩れ來るは如何にも不審のとならんか是れも亦

孤峯云暗通種意

故あるとにて當村は山水明媚にして奇花異草殊に多く
 恰かも一區の仙境にて今の武陵桃源と云ふべし然るに
 縣治には遠からず二日程にて往復すべし縣令丁高は郡
 懸卿の女婿にて貪婪飽くとなき小人なり此人此村の景
 色を羨み其知縣となりしより稍く手を下し非常の廉價
 にて此地を買ひ取り賣らざるものは法に中で強買と言
 はんか強奪と言はんか實に惡むべき手段にて全く此地
 を占領せり唯某に對して其毒手を加へざるは深き仔細
 のあるとなり某とても遂に免れ難きとは早く心に悟れ
 とも暫く様子を窺ふて油斷なさず時を俟ちたり斯る次
 第なれば此村には知縣の別業あり其他の住屋は皆其奴
 隸の所有なり此地の民は或は溝壑に死し或は他郷に離

散して一村の内唯我家園のみ舊時の春を殘留せり今逃
 ぶるが如き土地柄なれば浮世の沙汰も自然に此には洩
 れ來れり某又心を用ひ曾て目をかけ遣はせし二三の莊
 客猶ほ此地に留まりて密々某の許に來り此等の事をば
 通するなり今宵足下が我家に來りしは猶天助の厚きを
 知るべし此村は山水明媚なりと雖も風景佳絶なりと雖
 も足下に取らては陷阱なり地獄なり某夙く卿なりと推
 察して危む折から豫て某に密事を通する一人の莊客私
 かに來りて此家に宿りし買人は怪しき曲者なりとのと
 を知縣附屬の役人等が言ひ居たりとのとなるに予外見
 には足下を捕へん氣色を示し故意と事を荒立て、足下
 の戒心を喚ひ起し足下自ら遁逃したる形跡を殘し娘に

謀計を告げ示して知縣の雜兵來りなば他方に誘く手筈
 を定め置きしが彼等も決して抜かりはあるまゝ到底此
 道に尋ね來るは必然なり

と言ひかけて前面を見渡し

あれ見られよ彼の小川は温河と名け無數の溪水合して
 一の流となり此より三里許り上なる小丘を横斷して奔
 馳し來れるものなれば水勢極めて激しく其幅三四十丈
 に過ぎされども渡らんと甚だ難し唯某は平生注意して
 最も水勢の緩なる處を見立て筏を以て渡るべき工夫を
 ば設け置きたり筏もまた彼處に備へたり

と言ひつゝ、雜樹叢生して深林をなし河に沿ふて蘆葦繁く
 燦爛たる星光河流に映して、疎らに樹影と水色とを分つ處

を指し示せり此時後方に遠たしき聲の聞ゆるに驚き
二人齊しく見返れば一人の少女喘きく馳せ來りホツト
一息吐きながら

父上の教に任せ留守居してはべりしに知縣の下知なり
とて數多の雜人押し寄せ來り直ちに狼藉にも及ぶべか
りしを妾立ち出て父上の教をしまゝに辨疏して父も其
曲者を捕るん爲め立ち出て、若し追手の人の來りなば
東西に分れて追ひ留められよと吳々申し殘されしと告
げ彼の斬り壞ちたる壁の破口をも見せたるに漸く疑晴
れしと見ゑ二手に別れて東西に馳せ去りしか暫くあり
て成吉常に司馬氏の許に密事を通ずる莊客の名を遠たし
しく馳せ來り今がた來りし雜人等は東と西との方角を

尋ねあぐみ全く此家の主公に騙惑れたりと言ひ罵り此
家に向けて押し寄せる氣色なり御覺悟あれと言ひ捨て
馳せ去りしかば妾も已に心を決し平生父上の秘藏し
たまひし寶劍其他の重器を一箇に集め蓄ゑの金銀を囊
中よ盛ると其まゝ走り出てしにはや人聲の囂々ど眞近
く聞ゑはべりしを跡に聞きなし此處まで追ひすがりま
いらせたり暫時も猶豫はなり難し早く前面の岸に渡り
たまへ

と勸むるうち負かに追ひ來る敵ありけり其人員は辨ちか
たきも足音かけ聲を推測れば五六十人と知られたり司馬
騷は騒きたる氣色もなく坦然として揚雲に打ち向ひ
足下と我と踏み止りて奮戦せんには五十六の雜兵等

孤峯云文勢亦如弄流

は瞬くうちに塵になし得んが彼等を殺せしどて何の益にも立たざるを却つて前途に障碍を添ふん遁るゝこそましならめいサ此方ね
と二人の前きに立ちて森の叢中に分け入りて用意の後を引出して足場を計り河邊に生ひし揚柳の幹に綱をば結び付け先つ少女を扶け乗せ次て楊雲を強て乗らしめ自ら後に殿なし歩を後シシカに踏みかけて乗り移らんとしたる時逸早く進みたる雜兵四五人逃しはせしと駈け寄りしに老翁は右手に持ちたる鎖杖にて二三人を一齊に薙ぎ倒し續きし兵士の鬪躄ヒラリふひまに閃然と後ヒラリに飛び乗りて帯ひたる一刀抜く手も見せず繫結ひし端繩を斬り捨つれば後ヒラリは忽ち岸を離れ逆巻く水ヒラリに揺られつゝ下手の方に流るゝにや老

龍溪曰く佳人夢に落水に終るや否や

孤峯云漢高威二兒共是豪傑本色

翁は刀を娘に渡すや否水棹を取りて操りつゝ前岸に漕き寄せんと只管力を盡したり此時雜兵等は岸頭にて遁すな遣るなと呼び罵り十數人の弓手は岸頭に立ち現はれ射出す箭は雨より繁く楊雲は正面に立ち塞かり右に拂ひ左りに受け止め翁の棹を使ふに充分の力を用ひしめしが筏は急湍を押し披きはや前岸に達せんとする時楊雲が受け損したる流矢少女の左腕に中ると見ぬしが左足を筏の外に踐み出し忽ち水中に陥りたり矢よりも早き急流の瀾ヒラリ巻く波に引き込まれて行衛も知らそなりにけり楊雲はアナヤと叫ひ
早く筏をゝゝゝ筏をゝゝゝ救ひたまへ
と箭を切り拂ひつゝ呼はるを老翁は耳にも入れず漸く筏

を岸に漕ぎ付け

命なり何如すべき

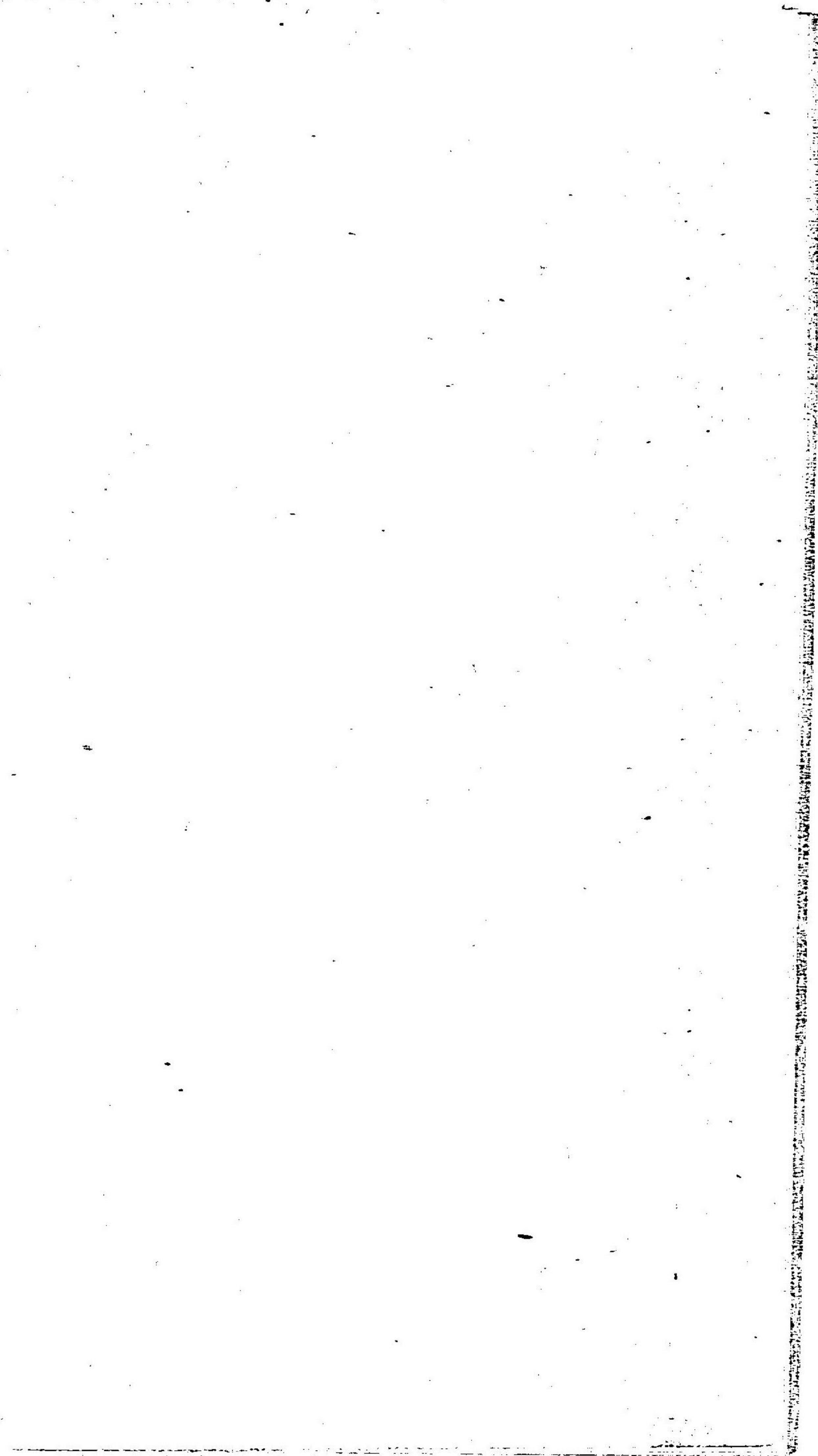
と一言せまのみ楊雲を見返りて速く岸に上られよと勸むる。楊雲は動きもやらず何事をか言はんとせざるを老翁は突と進み楊雲を腋下に抱き込み水棹を手操りて岸にヒラリと飛び上り

無益に心を勞する無れ

と言ひつゝ息をホット吐き黯然として霎時河水を眺めたり。憫むべし此少女は司馬驥が最愛の一女にて其名を雪映と呼び幼き時母に別れ父の手まほに養育られ容姿殊に端麗しく才識も人に立ち越る世に珍しき女丈夫なりし若し生存へて居たらんには此巻中の諸名士は競ふて配を求む

孤峯云至此寫出佳
人來歷自是老筆

べくまた此女も諸名士中の孰れにか伉儷を定めて天晴れ内助を良人に與ふべき家夫人となるを誤らざりしならん楊雲は初めに戸隙より窺ひしも急遽の場合定かに其容貌を知ら見分かす再度の對面も敵兵後へに逼れる危急の折りなれば唯其悲愁を帯ひて物語りし聲音の幽かに耳に残れるのみ今更悵恨の情に堪ふを河心を見渡せば唯星光の激浪に碎け水聲の巖礁に咽ふあるのみ



第十七回

猿嘯自沈青障月
鶴來應報碧桃春

孤蓬云有白衣宰相
住山中之趣

此處の何れの山中なるや著者自らも之を知らず唯見る緑
樹鬱蒼として耳に入るものは水聲鳥語目に遮るものは幽
泉怪石總ての風景自ら人煙を隔るの遠きを知らしむ斯る
深山にもまた棲む人のありしと見ぬ一軒の茅屋を大樹の
下に構へ白雲を藩籬となし青山を屏風となし奥床しく
も住みなせり主人は今何れか出て去りて其家を占めた
るは年紀五十有餘の老人と二十左右の少年なり是れ予前
きの夜温河の厄難を逃れて此山中に入り暫し其身を隠す
なる司馬驥揚雲の二人にて今まで何か話し居たりしが老
人は更らに語を次ぎ

彼奴は甚だ忠實なるものにて某が少壯の頃より養ひ居

たる奚奴シムヌなり彼の洞口に退隱の後深く將來を慮りしを以て密かに意を授けて此處には住はしめたりさればこゝろ前夜の急厄を逃れし後直ちに安全の棲處を得たり
榻 誠マコトに翁の深謀遠慮なかりせば某の身は今頃己に俎上の肉となりしならん再生の恩山よりも高く海よりも深し殊更愛女の

と言ふを老人は打ち消して

イヤ何より先きに足下と計議すべき一儀あり是より語コトの方向を如何に取りて進むべきか足下は今尊大人を配所に省せんとの意なれども愚見に依れば不可なるも似たり大人が馬市の害を論したるは固より至當の意見なり某は仇讐の遠からずして敗るゝを信せり彼れ固よ

り才能なく其奸智もまた豊かに嚴嵩に劣れり嚴嵩は唯一時の安を偷まんが爲め仇讐を助けて俺荅に利を啗はしめ馬市を開きしと雖も俺荅決して其欲を此に留むるものゝ非す必ず此によりて寇をなすべし其時嚴嵩は決して仇讐を助けむ必ず其罪を驚一人に歸して主上の之を誅戮するを傍觀するとならん驚の誅せらるゝ時は大人の冤罪晴るゝの秋にして即ち大人が當初獻したる諫言の的中したるを證明すべきを以て大人は重く任用せらるべし此事決して久しきにあらずされば足下が買豎に打扮ウチカケてはるゝ狄道に赴くとも大人は赦免に逢ふて彼地を出立ちし後とならん且つ足下の今の身は到處ウチウチ身を容るゝ餘地なき有様ならずや今朝廷接撫を四方に派

して處士の朝廷を議するものを捕獲するに急なれば足下は行旅中にも此網を免れん爲め畢生の力を盡さるを得ず假令無事に大人を省するとするも唯其顔を拜し相對して悲泣するに過ぎず足下の方さに志す所に於て何の益ありと思へる足下は己に大人と意見を異にし大人は官に在りて其職に由り君を正しきに誘はんその趣意なるに足下は初めより仕途に就かず唯此民を濟ふを以て自ら任じ其方向進退相異なれば大人に逢ひしとて足下の志業を補助するとはよもあるまじ若し路次にて不慮の變あらば多年の宿志も此に消去して徒らに笑を後世に残さんのみ某の見込みし如く仇讐敗れて大人世に出てなば足下の嫌疑も共に消へ失せ青天白日濶歩し

孤峯云眞是豪傑之言

て大道を歩行しつゝ、足下の所志を貫くの機會を得ん此時を俟つて京師に至り大人を省するところ安全の策ならめ急驟^ハれは事を誤り易し暫く某の意に任せ復た來る春を迎へんまで此に隠れて姦吏の氣焰を避け徐かに後事を計畫し再び世上に出ん時には思ふがまゝに運動するの準備をすること便宜なれ
 流石に老成の閱歴と鍊磨に鍊磨を加へたる智囊より振ひ出せし考案なれば楊雲も直ちに承諾して其意に同じけり其れより後は二人の賓客は日夜時勢を論じて濟民の策を講し治國の法を究め二人共に頗る得る所あり殊に楊雲は前きに其劍法の未熟にして老翁の伎倆の殊に精妙あるに感服しければ請ふて其術を研て怠ると無かりし實に楊雲

に取らては其天稟の^まにて成立し外より受けたる裨益とては極めて微少なりしに今其同志の老教師に値遇して老練成熟の智識より受くる所の利益は如何計りならん實に不幸中の大幸といふへし斯くて餘暇あるときは薪を採り果實を拾ひ凡る山中に生して食品に充つへきものは悉く採拾して雪中籠居の準備をなし兼て司馬驥が心を用ひて備へ置きたる穀物にも乏しからぬと猶ほも手厚く意を注ぎて半々年五六名の食に充つへき資料なくては心細しとて頻りに貯蓄に心掛けたりしは流石に老成の心構と知られたり

却説司馬驥はかの舊僕に意を授け時々縣治に詣りて巷の風説を探らしめしかば其身が知らんと思へる大抵の事柄

は知るを得たり時方さに嘉靖三十年の冬十一月降り積む雪は四方の山々を埋め軒端の外は寸碧をも剩さず唯一面の銀世界とはなれりかゝる深山なれば寒氣も殊に嚴寒く戶外にとては出ると能はず三人打ち寄りて爐を圍み昔語り浮世話に日を消して一月餘りを送りしに予此の多事なりし嘉靖三十年も暮れて三十一年の曆と改まりしかと積雪猶ほ深くして主人が山を出て、縣治の風聞を探るの便宜も猶ほ遮断れたり一日司馬驥は楊雲に向ひ

吾曹が斯く辛苦を嘗め萬死の途に出入して經營するも畢竟民を濟ふにあり朝廷若し其人を得て吾曹の志を所を行は、此上なきとにて豫て足下の言ふが如く吾曹は太平の逸民となりて一生を終らんのみされとも此は是

れ河清を俟つと同様決して望み難きとすれば遂に身を以て此業に犠牲とするまでに思ひ定めて計畫するの外なし然らば權豪に對して飽くまで抗争し正道を説き眞理を唱へ姦邪をして朝に立つと能はざるに至らしむるひまで公議を鼓動せざる可らず吾曹若し兵戈によりて事を定むるに決し成敗を天に任せて事成らば澤を民に流さん成らずんば名を後世に傳ゑんとの覺悟あらばいと易きとにていかにも簡率なる事業なり若し能く時に乘し機に投して驟起すれば五萬十萬の兵を得ると難きよあらず某と足下と之れを指揮して彼の抄掠をのみ事として絶て戰意なき所在の官軍を打ち破り險要の地に據りて糧を積み兵を養ひ大義を唱へて君側の惡を除

孤冬云所志不在功名
名濟民本意即在此
矣

いとを宣言し巖崙の罪惡を數へて之を露布し其横虐を憤ふる志士を招集し規畫其法を得ば忽ち大衆を收めて勢ひ京師を震動するにも至るべし其後の收局は暫く論議の外として先づ此處までに漕き付けるとは左程難事とも思はれずされども吾曹は全く此れに反し正道具理を根據として廣く同志を糾合し實力に依據せる議論を以て濟民の業を遂げんと決心したるなり而るに今吾曹の身上を顧れば資力の以て自ら支ゆる無く兵力の以て自ら守る無く僅か五六十の雜兵原に命運を制せらるゝ有様なり斯く軟弱なる脚跟にて狂瀾怒濤の中より立ち志業を貫かんとは思ひも寄らず足下も知らるゝ通り後漢の未諸名士相結んで清議を主張し朝政を非議し遂に

龍溪曰古來黨人
遭難の感、誰か之
れ無らむ、後の世
に處する者、亦た
省る所あるへし

黨人の名を負ふて廢錮せられ爾後天下の人心は之れに
向ふて皆黨人を是とし朝廷を非となし名士を敬愛する
の餘三君八俊八顧八及八厨等の稱を附して之を呼ひ名
士の自ら任ずる所も世人の望む所も甚だ重かりしかと
歸する所は空名虚譽にして遂に何事をも爲し得ず手を
束ねて宦官の餌食とかりしに非ずや唐末の朋黨も亦然
か清流の名甚だ響ばしかりしも遂に濁流に投せらるゝ
の慘狀を呈せり後世に至りて其皂白は判かるゝとも事
業を爲すの上より言へば極めて拙き者なり吾曹は唯正
理を唱へて止むべきに非ず正しく之を實行せんとする
ものなり然らば之をして行はれしむるの手段無るべか
らず其手段といへるは他にあらず我れ能く正道を保護

して非道の攻撃を防禦し得べき實力を有するると即ち是
なり吾人は已に劍を帯び自ら其身を護れり然れども是
唯一人若くは數人を防禦するに過ぎず今吾曹の大義と
して唱ふる所は民を濟はんと欲するの士は競ふて之れ
に就くも民を苦めて自ら利せんと欲するものは力を極
めて之に抗すへし漢唐の党人は強ち其説を行はんと求
めたるにあらざるも猶ほ無殘の最後を取れり今吾曹は
進んで其志す所を行はんと欲するものなり其位にあら
ず其職に居らずして自ら實行を試むるものに對し朝廷
は党人として之れを處するよ止まるべきや必ず叛賊を
以て待つとなるべし左すれば吾曹は此志を貫かんと企
つるの前に叛賊を以て手強き處分に逢ふも正當に之を

禦て自ら護る丈の實力を有し假令之を用ひざるも能く自ら支ゆるに足るの勢を保ち満を持して發せざるの間に朝廷の自ら^{アラタ}峻め自ら戒しめて此民を安するの道に向ふを希望せざる可らずさて此實力を收むるには其手段も色々にてまた容易のとはあらず先づ實力を得るとは第一の手段なるへし

斯く言ひかけて暫し考へ居たりしが

足下の同志といひ某の知己といひ實力を有するものは極めて稀れなり假令一二資力者のあるにせよ長く吾曹の進退を支ゆべきにあらず此事に就ては某別に計畫あり何れにせよ資財あり志氣ある人を多く仲間に加ふんと肝要なり交河縣河間府にありの知事趙端(字軌禮)は志

孤峯云深遠世情者
輒有此語

氣ありて正道を守るの人なり彼人決して今の身に安せざるは勿論時を得ば大に爲すとあらんと志したるや明なり此人曾祖以來蓄積夥しく中々の資産家なり某曾て面識あり然れども百敗撓まずといへるとは此人に就て望むべしとも思はれず其身富貴の家に生れて世味の酸辛を嘗めず唯義理を辨別するの才識あるが爲め世事に不平を抱くことを知り仁慈の心深きが故民の塗炭を憐むの情を生したるまでにて猶ほ彼魯敏行の如く統袴公子の臭味の免れかたし水火を踏んても濟民の志を貫くといふに至つては素より保し難き所ありされども差し當り此等の人に頼るの外なし足下の語によれば祖祐の有用の人物ならん其徒にも亦有爲の人物あるならん某に

同志者十餘名あれども其内機密を共にするの一二人に
過ぎず

と言ひ出つるに今迄黙して聞き居たりし楊雲の口を開き
奇機密謀の大事を爲すに止むを得ざる要訣なり晩生の
深く蘇老泉の遠慮説に感ずる所あり彼人言のすや君子
爲善之心與小人爲惡之心一也君子有機以成其善小人有
機以成其惡有機也雖惡亦或濟無機也雖善亦不克是故腹
心之臣不可一日無也司馬氏魏之賊也有賈充之徒爲之腹
心之臣以濟陳勝吳廣秦氏之湯武也無腹心之臣以不克何
則無腹心之臣者無機也又云のすや一家之中必有宗老一
介之士必有密友以開心胸以濟緩急是れ天子必ず腹心
の臣無かるべからざるを説きしものなりと雖も今吾曹

龍溪曰く人情世態
一言道著し盡く

の身に取りてもまた肝要の問題なり密事の泄れ易く謀
計の秘し難きは今更言ふまでもなし某を以て見れば君
子道を以て相結ぶば小人利を以て相黨するの深密なる
に若かず古より君子小人善惡の路を分つて互に黨を構
て相争ふに當りては君子の常に小人の爲めに害めらる
惟ふに小人奇機密謀の深至遠及するに若かざるに由る
なり君子善を爲すの心小人惡を爲すの心と同一なる
に常に機密に於て及ばざる所あるの未だ善を爲すと惡
を爲す程に深切ならざるにあらずや吾曹今日に於て尤
も注意すべきに則ち奇機密謀に相與かる人々の間に在
りと思はる

然り人を輕んずるの敗を取るの本なり正義の士其才識

孤峯云士福年少語
老作者本意寓在此

を恃み往々小人を輕侮を何ろ知らん小人の心を用ひ力を盡して君子を仆すに汲々たるは精至周到一点の抜目も無き程にあらんとは且つ勢位に據りて事を施し利祿に資りて人を用ゆるものは處士の道義によりて相結合するものよりも一層の便宜あり何を施してか行はれさらん何を欲してか得さらん我道實に尊く我行誠に正し天下自ら公論あり我能く之を唱へ之を誘は、天下の人心は靡然として我に向ふべしと信するは大なる過誤にて利を捨て、義に就く者は甚だ鮮かして義を捨て、利を取る者滔々皆是なり左れば悪人と雖も一たひ占め得たる勢位は容易に動かすべからず殊に悪人ほと己れの罪惡を能く知る者は莫し己れの罪惡を能く知るが故に

孤峯云引事實論辨
作者得意伎倆

常に人の己れを議するをも能く知れりされば己れを防護して其地位を保たんとするには思を焦し心を勞して唯至らざるを是れ懼るゝの有様なり己れに忤はんとするの色ある者は其未だ發せざるに及んで先づ之れを斥け己れに不利なる兆あるを見れば直ちに之を去るの計を設く苟くも己れに利ある者は之を籠絡して其爪牙となし又利によりて集まる者は悉く其股肱腹心となるが故に根蒂日に固ふして枝葉随つて繁し漢乃末梁驥及び其黨與の誅せられし時朝廷爲めに空虚となりしを見ても想ひやるべしさればこそ梁驥朝政を執ると十九年李林甫もまた十九年宋時秦檜も亦十九年に及べり斯く久しく政柄を執りて民之を厭ふと甚しきも容易に之を

除く、能はさかしを見れば、小人の心を用る、陰險、深毒、能く其地位を保つに汲々たるを見るべし、故に帝王の勢力を以てするも己に其根蒂を固めたる權臣を抜くと能はざりしは、史冊數其例を見せり、然らば吾曹能く之を除くに足るの實力を有するにあらざれば、奸臣の地位を動かして、濟民の業を立てんとは、思ひも寄らず、前にも演るが如く、先づ多く資力を得て、廣く有爲の士に結ひ、徐かに事を謀るに、若かず、兎角善事を思ひ立ちし者が、早く其功を挙げ、速かに其利澤を見んと、急馳るは、尤ものとなれども、是れ常に事を誤るの初めなり、士以て弘毅ならざるべからず、任重て道遠しと言はずや、吾曹若し此志を貫くを得ずんば、吾曹の行と事とを以て、後世に残し、後の豪傑に此

業を譲るも亦妨なし

と優然と構へて動かさるの有様なるを、少年盛氣の楊雲が一日も早く民を水火の中より救はんと希望せる熱心より見るときは、如何にも緩慢き様に思はれ、心中少しく安んぜざる所あるが如く、沈黙して聞き居るうちにも、不平の雲は、はやくも其額上に蔽ひ懸れり、斯くて二人は其後も時勢に就て互ひに討論し、前途の計畫も畧ぼ定まりし時は、稍く春暖の時節に向ひ、草木漸く生氣を顯はし、溪間の堅氷も融け、山頭の白雪も消え、なんとする二月中浣になりしかば、司馬驥は蒼頭を城府に遣り、例によりて、巷の風聞を探らせたるに、三月の初に歸り來りて種々の事ども報するうちに、此年正月、俺答兵を出たして、大同に

打ち入りしとの確報ありしかば司馬驥は手を拍つて快笑し

我言中れり楊君大人の赦免は近きにあるべし彼俺答馬市によりて利を攫み遂に侵入するに至れり此を主張して俺答を引き入れしは仇鸞なり此事を不可として仇鸞を讎めたるは楊氏なり仇鸞は此によりて罪を得べく楊氏は此によりて賞せらるべし如何なる濁朝と雖も斯ばかり明白なる事に曖昧なる處置を施さんとも思はれず奸智に長けたる嚴嵩は其仇鸞を助けたる跡を蔽はん爲め罪を仇鸞のみに塗り付けて之を亡ぼさ楊氏を請所より召し返して官爵を進むるを天子に奏するにも至るべし

と手に取る如く明言せり果せる哉此年の秋七月俺答薊州に攻め入りしに仇鸞は時に疽を患て臥し居たりしが己れの罪を償はん爲め疾を興して督戦せんと請願に及みしかば朝議は之を不可なりとして兵部尙書趙錦に詔して仇鸞が大將軍の印綬を收め更らに總兵官陳時を擧げて代はらしめしかば仇鸞は悲憤して病益々劇しく遂に死去せり此時徐階は仇鸞敵に通して國を誤る罪は悖逆に同じと奏聞したるに予詔して其棺を剖き屍を戮し全家悉く市に斬られたり

第十八回

泰山北斗千年在
和氣春風四座傾

交河縣は河間府城の南八十里にあり金の時始めて交河縣を置けり蓋し滹沱高河の二水交流する處なるを以て斯くは名けたるなり編戸十四里民俗は頗る淳朴にして農桑を務め氣節を尙ひ浮華を好まず知縣趙端は盛徳の聞ゑあり殊に久しく其任にあれば能く其風俗人情に通し政令私なく治績極めて多しと云又其家産豊富なるを以て凶年飢歲には屢救恤を施しければ民皆其徳を仰き鬼神の如く敬ひ父母の如く親みけり若し外より來りて此地方を觀るときは今の天下にも猶ほ此の如き樂地ありやとの疑を生ずるならん趙端は世族にて京師に官せし時官は左のみ重職には至らざりしも人皆之を敬重せるより遂に嚴家に忌れて

地方に赴任するとはなれりかゝる人物なれば朝政の日に紊亂するを嘆き諫臣諍士苟くも嚴嵩を論ずるあれば忽ち貶竄黜罰せらるゝを見て不平に堪ゑざる冠を掛けて退隱せんと欲するも民其徳を慕ひ強て留むるを見てまた之を捨て去るに忍びざ心ならずも職にありて物憂き歲月を送りけるうち向きに鄢按撫と共に朝廷より派遣せられたる馬司諫は河間府に蒞み府治内の知州知縣を招集し方今處士横議して朝政を是非し動もすれば朋黨を結んで朝旨に抗するの萌しあるを以て嚴丞相深く慮る所ありて天子に奏し禍を未前に遏絶せんとの御趣意にて苟くも朝議を是非し朝廷の處置に就き誹謗するものあらば皆是れ國の平和を亂るものなれば嚴しく詮索して之を捕獲し一に朝廷

孤峯云暗通題意

の命を受けて之を處分すべし州治縣治の事を司る人々は皆直ちに民に接するものなれば宜しく此旨を傾いて偵吏を密にし間諜を嚴にして怠りなく不逞の徒を捕縛すべし右に係る費用は其亂徒を捕縛し其家を藉没して得たる財産を以て之れに充て給らざる分は其者の親戚等に過料を課して之れを償ひ猶ほ不足あらば縣治内の富豪に獻金を命ずるも構ひ無し宜く財用を吝まずして朝廷の御趣意を貫徹せしむべしとのを告示したるに他の牧民官は何れも唯々諾々として命を奉けるに趙端は獨り心に快からず斯る無道なる法制の何とて眞面目に執行さるべき苟くも道を學んで事の是非を辨する者秦皇の虐制にもれさく劣らぬ手段を以て志氣ある者を捕らへんとは思ひも寄ら

ぞと心密かに決したれど色にも出さず馬氏に向ひては
 某の治内は至つて静謐にて民皆農桑を務め國家の大事
 なをを論議する者どては一人も之れなく若し不逞の徒
 あれば皆去りて他方に走り某に累ひを及ぼす者も之れ
 あるまじ現今は勿論將來とて某の治内より不逞の徒
 を見出して捕縛する等のは決して有るまじ
 と演べたるのみ馬氏は本と平庸の人物にて執念く惡事を
 働き飽くまで嚴嵩を助けて身の榮利を計らんとする程の
 邪智もなく又趙端の治績は世に隠れなきとなれば敢て其
 語に偽りありとも疑はず實に尤なりと點頭て其政績を賛
 揚せり此れより後趙端は常に時事を慨し斯る有様にて移
 り行かば朱氏の社稷も危からん民の疾苦は如何ばかりな

龍溪曰く冷熱胸中
 に來往す往々此種
 の人物を見る

らんぞ日夜憂愁に沈めるも素より勇斷果決に乏しき性質
 なれば此處ぞ踏み切りて身を挺せるとはなし得ず時に
 不平の鬱積して慷慨悲憤の頂點に達すれば我も丈夫なり
 逆氣を一掃し非政を革むるに於て争て人後に落ちん今よ
 り民を水火の中に救ひ國を泰山の安きに置かん身を殺し
 て仁を爲すは正に此時にありと激發するともあれど其情
 熱稍く冷却すれば又更らに意を轉して人生實に朝露の如
 し世事は恰かも夢幻に似たりまいよ身を挺て事を企る
 も若し成らずんば徒らに笑ひを招くに過ぎぬ進んで大任
 に當らんより退いて一身を潔おするに若かず青山豈我跡
 を埋るの地無らんやと思ひ直をもありとす時方さに嘉靖
 三十一年秋八月十五夜趙端は頃日其家を訪ひ來りし三名

の賓客を母屋を離れし園中の高樓に延き仲秋の月を望みながら酒酌みかわしていと快げに打ち語ひてあり抑も此三人は何人なる是れ乎司馬驥楊雲祖祐の三名にて昨年来山中に入りて逮捕を遁れたりし司馬驥楊雲は仇讐己に誅せられて楊繼盛の忠義顯然たるにより天子殊に詔を下して繼盛を配所より召し更らに位爵を加へて任用すべき思命ありし旨を聞き傳へ楊雲の悦と言ふまでもなく司馬驥は事を爲すの時期到来せりと打ち喜ひ相携へて山を出て兼て志せし如く先づ趙端を説き込まんと交河縣をさして來かゝる途中是れも亦往時追手を斫り抜け虎口を逃れて各地に流寓し僅かに生命を全せる祖祐が同じく趙端を頼まんと此地に來るに出逢ひしかば相共に無事を祝し打ち

伴れて此家を訪ひ司馬驥は兼て主人に面識あるのみならず趙端は驥を以て當世の人傑なりと信し深く其爲人に服したるとなれば師禮を執りて之を迎へり楊雲に對しては其父の清聲朝野に沿く互市を切論して貶謫せられ愈其名の馨ばしきに頃日又配所より任用せられたるを聞き一層欣羨そるのみか其子の活潑にして夙日に志を仕途に絶ち屢危険を冒して奸臣の膽を寒からしめたるを知りて深く愛敬するの情を起し祖祐が世に隠れなき名家に生れて能く其財を散して窮を恤み又四方の名士と結んで國事に奔走するを嘉し其儀容堂々として磊然たる風采眉宇に表はれたるを見て頻りに歎稱し只相逢ふの晩かりしを憾み日夜相對して談話するを此上なき快樂とせり蓋し一州一縣

の守令となりて其治内の最上なる職に任し勢位其右に出るものなきときは来る者は求むる所ありて来り謁する者は望む所ありて謁し其平生己れに對して言を發する者は皆腰を屈し仰き視て恐疎の間に陳辨する者のみ其頭上より臨んで之に接するものは甚だ稀れなりされば唯己れの人爵の貴きを知りて猶ほ之れよりも貴き天爵の他人に存するを知らず漫に威權を弄して民を虐げ財を貪りて飽くとなき偏小なる區域内に僻在して交遊に乏しく物に觸れ事に接するとも甚だ少きを以て才識を研ぐの機會も稀れに知見を廣むるの方便も薄きがゆゑ固有の才識あるも漸く消滅して遂に井底の蛙と變化し去りて世の情勢と隔離し情に戻り理に反ける政令を施して自ら得たりとするが

思軒曰地方官情狀
說得宛然如賭

如きは當時牧民の職にある者往々免れざる所なるに趙端は早く此に意を注ぎ己れの居る所の地位は己れを愚にするものなりと信じ己れに益を與ふる良友無きを以て己れの地位に歸し幸ひに知見を補益すべき良友を得て交はるを得ば何程か樂しからんと平生心に希圖したりしに今三名の俊傑一時に訪ひ來り壯快なる話説と精確なる議論風發潮湧して唯々耳を傾くとのみなるに予平生精練にだも飲ぶる者が初めて大半の響に就きたる如く殆んど三人の談論を貪り啗ふの趣ありし殊に楊雲が孟子の神髓を諦ひ抜て論辨せる濟民の説は最も耳新たに聞えけり時に趙端は欄に倚り今まで隈なく照り渡りて池中に其影を印したる明月も陰雲の爲めに其光を蔽はれ池中の玉輪將さ

孤峯云形容頗有趣

に滅せんとするを指し

小人朝に満ちて聰明を蔽ひ聖徳爲めに曇りを生じて下民の情を照らしたまわぬ今日の有様は諸公の兼て知らるゝ所なるが某も憂憤に堪へぞ京師に在りし時一たび時事を論じて斥けられ此に來りて民を牧するの職に任じ猶官籍に身を掲ぐるは不本意の至りなれども迎も天下の蒼生を安んずると能わすとせば寧ろ一縣内の民なりとも其所を得させたき宿願にて幾度の退隱せんと思ふ心を取り直して久しく賢路を塞ぎたりされども是れ日夜某の心を安んせざる所なれば早晚職を辭して赤松子に隨はんと存ぞるなり願くは諸公いつまでも此に逗留りて某が官を捨て閑を得るの日を待たれよ

と思ひ入りて演べけるに司馬驥は先づ語をひらき

趙公の懇懃なる待遇は謝するに餘りありされども某等は官家の爲めに罪人と見做されたる浮浪の徒なり趙公の徳を慕ふてはるゝ清門を敲きしとはいへ一朝命ありて其等を捕縛すべきの沙汰あらば公は朝廷の官人なれば遲疑なく其職を盡さる可らぞ私の交誼によりて某等を見逃さば正しく人臣の義に背けり依て某等は兼て申し合せしともあれば今より去りて居を移し公に累いを及ぼさるうちに此地を出立して更らに志を方に行かんと存するなり

と思ひありげに演べ了りし其語を次で楊雲は徐かに趙端に打ち向ひ

某等不才にして罪を朝廷に得身を容るゝ處なしされ
ども宿志を貫つらひざる間は逮捕の命には應じ難し餘義な
く其命に抗するに至らば朝廷の官人たる公に對しても
敵意を挾むに至らん誠に心苦しき次第なれば是れより
暇を乞ふて去らんと決心せり

猶ほ其語を次で言ひ出んとするを打ち消して趙端を少し
く怒氣を帯びて

意外なる語を承るものかな某は已に諸君を知れり諸君
の未だ某を知らずや某已に諸君と交を締くわびて相共に心
を談ずるうゑは某も亦諸君と事を共にするものなり朝
廷若し命を下して諸君を逮捕せば某も亦諸君と共に其
命に抗すべし力能く之れに抗するに堪たへずんば諸君と

生死を與にすべし某已に諸君を延て柴門の中に誘ひた
れば諸君假令此家を去るとも諸君に係る某の嫌忌晴れ
んやうなし某已に決心せり某已に覺悟せり明日直ちに
職を辭し諸君と進退を共にすべし往昔黨人の禍に范滂
將さに死に就かんとして其母に別るゝ時其母は汝今得
與李杜齊名死何恨既有令名復求壽考可兼得乎といへり
婦人だも猶ほ此志あり丈夫豈徒らに生きんや某もまた
諸君の後に名を列ぬるを得ば死すとも何る恨みん諸君
の何故に某を疏とんじて淺間しき語を出したまへる
と或の怨み或の怒り誠意面に現あられたり
司 某等怒ひに此に來りし爲め公の身を誤らしめたり
趙 否然らば某が自ら誤らんとするを諸君の來りて救ひた

まへるなり

祖 趙君の御決心の某等の幸なり此上の趙君に頼りて共に
前途を謀るの外なし

と峻嚴なる音調にていとも簡率に演べたりしかば賓主の
間の問答も此にて忽ち局を結べり斯くて趙端の佳肴を添
ゑて頻りに酒をすゝめければ孰れも興に入り互ひに打ち
解け奥底なく談論するに至りしに誰れも隔意なき青州
從事が相互の心腸に分け入りて融和の情を發生せしめた
るの効なるべし斯くて次の日趙端の疾く起きて辭表を草
し夫人曾氏に其由を告げゝるに曾氏の痛く驚きて
我夫の物に狂ひたまへるにあらずや響きに京師に在り
し時朝廷を怨みたてまつりてよしなき諫言だてをなし

孤峯云文情奇絶

龍溪曰英雄豪傑

小人姦徒、公卿紳

縉、槍父野老、貞女

姦婦、形容偏らさ

ず、粗に入り精に

入る是れ作者の本

領

たましいしにより京師の住居もかなわぬ斯る邊陲に貶謫
同様の身となりたましいしにあらざや知縣の職の重任と
の申しながら昔に比ぶれば痛く御身を降したまへるな
り生涯を安樂に送りてこる人と生れし甲斐もあらんに
故らに危き路を踏みたまい我より榮利を抛ちて貧賤の
人となり下らんとし才智ある人の所爲とも覺へはべら
ず好事も事にころよれ篤と御熟考ありて進退をば定め
たまへ

と言ひつゝ涙をハラ／＼と澀ぎたり趙端の慰藉めて

祖先以來我家巨萬の富を積みたれば假令職を辭するど
も生涯を安く送らん何の難きとあらん士君子の進退
去就の後の世までも批評を受くるものなり婦女子の知

るべきとにはあらざ唯某の心に任せられよ
 夫人 否々己に百年の身を任せし上は良人の榮辱はまた妾
 の榮辱にはべるものなとて御身の心にのみ任すべき妾
 は兎もあれ常に親しく出入して我家の事には細大とな
 く興りある閻甲羅丙には再應御相談あるこそよけれ御
 自身の獨斷もて斯る大事を決したまふは粗忽の舉動に
 はべらざるや妾も耳にはべるものを頃日家に逗留せる賓
 客は世に恐ろしき謀反を企てし人々とか中外の人又は
 嚴しく秘めたまふとも人の口には鎖鑰なし早くも洩れ
 て妾の耳には入りはべり必定謀叛人に唆誘かされて一
 味したまひしならん丈夫の志ありて爲すとならば妾は
 留めはべらねど生涯を委ねたる妾にまでも秘めたまふ

は餘りといへば情なし

と或は怨み或は嘆ち袂に縋りてさめくくと打ち泣くに
 趙端も持てあまし眼を閉ぢて黙然たり抑も趙端の夫人曾
 氏は本と良家の出にあらず趙端が京師に在りし時其容色
 を愛で購ふて小星となしたるが正室世を逝りし後上せて
 嫡夫人となし益寵愛し夫人の言ふ所は何事にあれ家門の
 間に行はれ施て外事にまで其實力を及ぼしけり夫人固よ
 り伶俐にして辯才あり年は尙ほ二十の上をニツ三ツ越し
 たるなれど萬事につけて立ちふるまふ様ほ多く世故を経
 來りし婦人にもをさく劣らず家政を經理する上に於て
 も外事を裁制する上に於ても屢良人を感服せしめ良人は
 常に賢夫人を以て許す程なれば萬事婦人の意のままに趙

孤峯云批薩司長此
亂階

家の内政を主宰せり斯る婦人の才幹が其所天に内助を與
ゑて其人を益するとは極めて稀れにして反つて其人の徳
を傷け家門に累ひを來すは世に少からざる例なり閻甲羅
丙の兩人は日頃趙家に入出入りして先づ夫人曾氏より取り
入り何事も其意を迎へて忠實に立ち働き諸事に援け目な
く周旋せるより遂に曾氏の信任を得て今は其家政にまで
參與するに至りしものなり曾氏は此兩人を二なき者と思
ひ夫に推舉して其才能を稱へ重く用ひんとを勸めけるに
趙端もまた此二人を信じて内外の諸事を打ち任せしも未
だ縣治の公務に與かるの路を開かさりしは何か思ふ仔細
のあるとにや何れにせよ此兩人が趙端夫婦に重用せらる
ゝは他人の羨むほそにて殊に閻甲は些の文字もありて詩

思軒曰嘗謂安井息
軒痘喉嘆其盡人情
噫何鄉無錢氏之族
何家無錢氏之客可
以爲長息

才は常人より立ち優り時々趙端の稱賛に逢ふとあれば時に
風流韻事の對手ともなりて趙端の側近く接しけり此の如
き人物果して此の如き家門に利益ありや閻家繁昌して善
事のみ打ち續き裕かに世を渡るの日にありては其家に出
入するものは孰れも善人と見へ其家の爲めに計るとも渾
て忠實に思はるゝが常なりされども一朝禍害の湧き出て
家の浮沈にも係はる大事あらん時其禍は能く明鏡とな
りて平生人心の奥底に潜みて現はれざる善惡の地金を照
らし出すべし若し趙氏の家門に涙の漲るどもいふべき時
節あらんには其時こそ二人の心術の判かるゝ日なるべし
斯くて夫人曾氏は人を馳せ閻甲羅丙を招き寄せて頃日主
公の思ひ立ちし辭職の事を語り出で相談に及びけるに二

人は早く夫人の意を迎へ

相公、假令勇退の御志切なるとも民の慕ひまいらすと影の形に随ふ如き有様なればいかで辭職の出來べき長く此地を治めたまい民を安ずるところ願はしけれまた近頃館に参りしと云ふ賓客は以前御知己チカニにあれ御朋友にもあれ已に罪名を負ふたる人々ならば速かに放逐したまふと肝要なり

と圖に乗りて語り出づるに趙端は大に怒り

過言なり閻甲、羅丙、我心事をも知らずして漫りに發言するは奇怪千萬なり辭職の義は暫くさし措き苟くも縉紳の家の賓客となりし士人を放逐呼ばりは何事ぞと平生怒るとの稀れなる趙端の氣色いつに變りて見ゆけ

れば夫人は已に其機を推し

今日辭表を捧ぐる事を御見合せありて他日のとと遊ばされ猶ほ今宵御酒宴を開きたまいて主公の左程までに敬重ひたまへる賓客ならば妾も其席に侍りて歡ヨロコビを辨シけまいらせん閻甲、羅丙も共に席末に陪從を御許容ヨコヒあらば賓客の爲人ヒトナリを伺ひ知り何かにつけて便宜多かり

と説き勧めければ趙端も同意して即日辭職と決したる一念の夫人の舌端に捲き去られて今は彼新來の客に逢はざりし以前の趙端とはなれり

却説司馬驥、楊雲等三人は此家に來りし初より別院に請せられ主人の外は他に對面するともなく主人は舊友の故ありて密かに尋ね來りしと家内に披露し樸實なる一人の家

僮を附け諸事懇切に取り賄ひしに三人も主人の注意厚き
 に感じまた思ひしよりは決斷の速かなりしを稱して頻り
 に趙端の風采を稱賛し居たり斯くて燭花を擧ぐる頃母屋
 より奚奴を以て今夕廳前に於て小宴を開き荆妻も御席に
 侍べりたく一二の知人も席末を汚したき筈にて諸君を請
 おとなれば何卒御入來あらんとを懇懇に言ひ來りしか
 ば三人は其心中に於てさては今日職を辭したるを披露
 せんが爲めの酒宴ならんと推測して怪しまず何れも衣帽
 を整へ案内に伴れて席に進みしかば趙端は出で迎へて懇
 ろに挨拶なし夫人をも引き合せて寒暄を叙るうち美酒佳
 殺はそやく卓上に列し芳香は中堂に薫じ渡れり曾夫人は
 初めより三人の來客は世に怖ろしき謀叛を企てしといふ

人々なれば定めて粹惡なる相貌を表したる田舎漢ならん
 と想像して今熟々三人の風采を見るに一人は年方さに五
 十を過ぎ威容堂々として鬚髯殊に美しく眼光炯々として
 人を射るうちにも頗る快豁なる風采を帯び年齢もて煉磨
 したる應對進退は能く俗を脱して又鄙野に傾かず其說話
 は人に阿らざる又人に逆はず縦横談柄を弄するが中にも巧
 み迂曲して物に觸れざるは流石に老雄と思はれたり一
 人は年三紀三十許り魁偉なる相貌威ありて猛ならず寡言に
 して人と相較するの色なく氣韻峻尙人をして自然に愛敬
 を起さしむべきの態度を備へたり今一人は年尙ほ二十左
 右色白く眉秀て音吐清爽にて論談頗る活潑なるうちも
 頗る思慮に富み儒雅なる風采を隲さず何れの處に投げ出

孤室云婦人多情小
人輕薄之惡奴得宛
然

すも只男性にのみ愛せらるゝの人とは思はれぞ曾夫人も
座にありて頻りに和樂を覺へて見ゑけるが司馬驥は少年
の時にありて面白き話など取雜せて巧みに演ずるにぞ孰
れも笑壺エツホに入り閨羅の二人も今は互ひの間に挟みたりし
疑惑トビシの扉を我より打ち開きて談話を持ち出すに至れり曾
夫人も夫の愛敬せる賓客が斯くまでに軒昂ケンオウたる人とは想
はざりしに其坐作進退の都雅ミヤビヤカなるのみか長き間の談話に
急逼せる語勢とてはなく頗る餘裕ありて露然たる情味の
坐中に漲る計りなるを覺へて愈心を安着ヤサツクけ今は唯此貴き
賓客を失はざらんとを恐るゝの情を生じ更漏の無情に此
席を徹するの聲を報せんかと只管氣遣ふまでに思ひ進み
趙端シヤウタンが頻りに頷きて楊雲の議論を聞き居たるに心付き眸

孤室云千古金言散
服散服

を凝らして楊雲を視てあり此時楊雲は笑を含みて
功名に志して功名を得ず功名に志さずして功名自ら至
る世間唯意ありて爲すソレヒトとほと齟齬ソウコ多きを覺ゆるなり念
を意を用ひて其事の成るをのみ苦慮クロするにより若し失
敗するときは強く心に感じ痛く望を傷くるが故に意あ
りて爲せし事には齟齬多きを覺る意無かして爲せし事
には失錯あるも心に留めざるなり

と言ひ了りて最前より説き來りし論局を結びたり

少壯趙の時には功名の念甚だ熾なれども此の雄志も年と
共に消磨して若し時世を慨するとあれば唯身を潔ツヤおす
るの念慮にのみ先たれて兎角に進取の心は出でず
と言ひさして歎息したる時楊雲は先程よりの笑容を其儘

に持ち續けて居たりしが

^根然りさりながら杜詩にも男兒功名遂亦在老大時と言ひ

しを記せり

と言ひつゝ座中を顧れば祖祐は羅丙と何事をか話してあり司馬驥は閻甲の問ひに答ふるの狀あり不圖曾夫人と顔見合せ初めて夫人が己れの物語に意を込めて聞き居たりし素振に心附きたり曾夫人は今楊雲が話を止めて己れの方に振り向きしを見ていと羞らいたる面色にて纔かに楊雲を見返せしが其秋波には一種の情趣を泛べたり斯くて夜も痛く深けたれば各暇を告げて席を退きけり其翌日楊雲は司馬驥に向ひ

趙君は昨朝辭職すべしと明言したりしに昨夜其事に附

て何の話も無かりしは事に紛れて隠れしにあらすや

^司否々隠れしにはあらず未だ辭表を出さざるなり某が曾

て卿に話せしは即ち此事なり彼れ公正の人なれども如何せん勇斷果決の力に乏し察する所夫人に支へられしならん彼夫人は

と言ひかけ語途切れしが^{低聲}にて賢夫人なりと一言し更らに語を轉じて

趙端假令職を辭せども彼愈志を決して吾曹に與せば我に於て大利あり唯心に關するは同席しよる二人の者なり彼等は正人とは受け取られず趙端の門内に彼等の通ふべき道あるは如何にも奇怪なり

^祖羅丙とやらん呼べる者は頗る俗才に長けたるやう思は

れたり

^楊 閻甲とやらんいふ人は唯詩賦の話のみなしたりき何れにせよ世に要用なき人と見受けたり
^司 某等の天地には要なきにせよ他の世界には要なる人なるも計られず油断のならぬとすかし

楊雲は司馬驥に對ひ

某等此地に來りしよりこの別院にのこ屏居して外へ出るととてはなく心氣頗る鬱塞せり昨年の穴居以來身体の衰弱するを覺ゆるは勞動の足らざるに由るならん今日^フは勉めて城市に出で郊外に散策を試みんと思へり尤も三人打ち揃ふて徘徊せば人に怪まるゝともあらん依て某は獨行せんと存するなり此後不慮の事なしとも言

ひ難ければ城中城外の地理をば委しく辨じ置かねばなるまじ

^司 實に尤もなり足下の隨意にしたまふべし何れ今日は趙端の音信もあるべければ我等二人は留守役を務むべし萬事に扱かりはあるまじけれと注意に注意を加ゑたまへ

斯くて楊雲は二人に辭し服裝を變じて城市を此處^{コ、カニ}彼處と徘徊し杖を郊外に曳き人家を離るゝ三里計りにして樹木鬱蒼たる森林中に廟宇と覺がしく目に觸れしものありしかば暫し足を休めんと林中に入るに前面の頗る開濶にして左右に數軒の房舍あり何れも清潔にして幽靜なり奥に一字の關帝廟ありて結構も頗る宏壯なり前んで前庭を見

渡せば由緒ある古廟と覺ぼしく壁上には世に聞ゑたる名
士の參詣して題したる詩篇も多く其殿堂は數次修覆を加
ゑしと見ゆるも其全体の構造より推す時は宋朝の末年か
元朝の初年に創造したるもの今に存在したりと思はる廟
の内外掃除行届きて供物等の盛なるは祈念者の多きを證
せり楊雲は暫く廟中に憩ひ壁上の詩に次韻唱和の諸作あ
るを眺め不圖前年魯英に別かるゝ時賦したる詩と魯英の
次韻したるを思ひ出し其心中に思ふやう彼人若し此邊
に漂泊して此廟宇に詣づる事もあらば再び相會するの便
宜どもならんと友を懷ふの心より果敢なきとを空憑^{ソラカケ}筆
を把りて二人唱和の舊製を壁上に書し付け廟を出て、假
寓に歸りけり次の日はまた司馬驥祖裕と相伴ふて城の内

孤家云奇構妙趣

外を漫行なし日暮に及び歸り來れば楊雲は平生の快活に
引さかへ案に擡れ例に無き不快の顔色額にかゝれる愁雲
ははやくも諸人の目にとまれり司馬驥は先づ聲をかけ

楊君恙ありや

否、、、然り、、、心地甚だ惡し

司

久しぶりに廣き天地に放ふり出されて珍らしき外間の
事物に觸れたるが爲め心身を錯亂せるにあらずや

と快笑しつゝ問ひかくれば楊雲は眞面目にて

若し外にありしならば此禍害、、、否此病は萌さど
り老ならん凡る世の中に家の内ほと思まはしきものは
あらず

と頗る不満の口氣にて語音も何となく刺を帯ふるが如く

又云自司馬驥肚裏
寫出妙極矣

に聞ふたり司馬驥は楊雲と共に居ると一歳に餘まり其間
或は共に鋒鏑の下に立ちて生死を一髪の間に争ひ或は山
中穴居の苦難を共にして無聊の歲月を送り手を携へて酸
辛痛苦人生の堪ふ難き逆境にのみ入り込みしも毎に談笑
の間に此等の險路を踏み越へ恰かも艱難を見て人間の宜
く當るべき常務となし毫も念頭に懸けざるものゝ如し此
一事は司馬驥の常に感歎する所なりしに今楊雲が斯くま
でに心氣を傷めて愁に沈めるは不思議のとなりと思へど
も問はんやうなく其夜は其儘に寢に就きけり
翌朝になりても楊雲の顔色は前夜にうわらすソコくに
朝食を仕まひ二人に辭して立ち出でたり司馬驥は不審に
堪ふず其心に思ひけるは必定昨日趙端と何事を争ふて

思軒曰突如來如妙
甚因憶余嘗在燕京
一日散策失路入關
帝廟廻視一遍急欲
退會有數犬偃臥於
簷下聞人足音忽群
起信々然環余而吠
余左右揮杖旋轉殆
登頓守僧出一磨斤
之聲挺身而逃楊士

不快の心を生せしなるべし今宵歸りなば問ひ試みんと待
ち構へたり茲に又楊雲は獨り城内郭外を逍遙し其日も稍
傾く頃に彼の關帝廟に詣り人もあらば古廟の來歴を聞か
んものをも行みける後より大聲揚げて
來れり來れりタスソレウシロアアアア
と呼ぶものあるに流石の楊雲も打ち驚き一期の浮沈と覺
悟を極め身構ふなして振り顧れば思ひかけなき馬忠にて
後より魯英も出で來り續て孫遠も進み寄りぬ楊雲は身の
大事ぞと戒めたる機勢に引きかゝる意外のコトに語も出でず
笑ひを以て立ち迎へ
絶ゑて久しき孫先生魯君も共に恙なく相會ふとの嬉し
さよ馬君とは其後邂逅したりしも

龍圖帝廟之遇詩所
謂運道相遇遇我願
兮者也思軒居士關
帝廟之遇壁所請邑
犬群吠々所怪兮者
也

と言ふ時馬忠の已に楊雲の前に進み
珍らしや思入前きに其を出し抜いて痛く嘗なめたり
餘りに無情の仕方ならずや
と言ひかけて怨むが如く訴ふるが如く眞率なる語のうち
に實意を込め又其面色には己れの最も敬愛せる親友に
遇へる無量の喜びを表しけり此時孫遠魯英も右左より進
みより暫しの間は語もなく唯眼中に喜悲の情を一度に運
び來りて互ひに見つめ居たるのみ楊雲は先づ孫遠に向ひ
皇天爭で善人を慙まざらん斯く尊容に接するにつけて
も
と言ひかけて其語を止め更らに魯英の方に振り向き徐か
に手を握りて

孤雲一語妙極矣

又云臨然之悟可掬
也

魯君能くこそ無事に居たまひし某は唯夢かと計りに思
ふのみ
此時魯英の楊雲と顔見合せて心腸よりせぐり來る涙を忍
び濕み聲にて
楊君にも恙もあらで
と言ひしのみ暫し語も無かりしが人の見る前女々しき振
舞と笑われんかと強て氣を勵まし
盟兄に別れて幾程もなく不慮の厄難身に降りかゝり酸
辛艱苦の數々を冒かしたつ凌ぎつ渡る世に此身一個を容
れ兼ねて死を決せしも幾度か斯る世路を渡るにも唯盟
兄あるとを心に記し又盟兄に會ふとを心に樂み其れよ
り生ずる勇氣にて今日まで生存へたり再會の嬉しさは